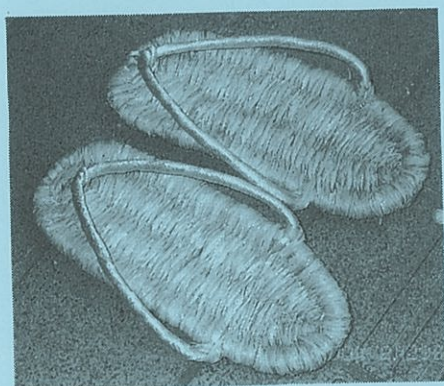
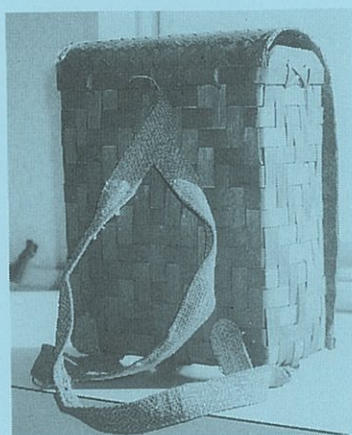
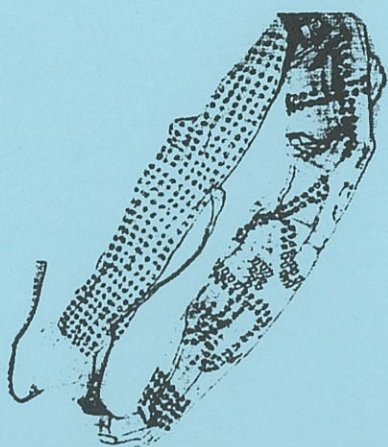


北伊予の伝承

V



松前町東公民館

〔表紙解説〕

題字 松田 茂

代用品

昭和十二年七月に起こった日中両軍の衝突事件はだんだん拡大され、ついに華北・華中・華南に飛び火し、中国全面が戦争状態となり、長期化されていた。

もともと資源の少ない日本は徐々に生活物資が不足しはじめた。食料、衣料をはじめ、すべての物資は統制され、配給制となった。国民は「お国のため」という金科玉条にからめられ、「はしがりません、勝つまでは」と戦争に協力することが義務づけされた。金属、ゴム、革製品は特に軍需に回されたので国民は知恵をしばってその「代用品」を考えついた。竹製のランドセル、木製の弁当箱、弁当行吏ごうりの復活、竹製の帽章、陶製のボタンが使われた。

学童通学用の履物は「チリゾウリ」が奨励され、学校でも「全校ゾウリ作り大会」も開かれた。

千人針

戦線に出征していく者は、婦人千人の熱意のこもった「千人針」、男子の力を集めた「千人力」を肌身につけて出発した。弾よけのまじないともいわれ、これをつけていて命びろいをしたという神話がもてはやされた。

戦線の兵士に送る慰文袋には必ず同封していて、受け取られた兵士によるこぼれたという。

発刊にあたって

今年はこちら二〇〇〇年、二十世紀最後の年になりました。我国にとりまして、今世紀最も重大な出来事と思われる第二次世界大戦について語り伝えることは、意義深いものがあると思います。

終戦から早くも五十五年の月日が流れ去り、戦争について語ることができる人たちも、だんだん少なくなつて参りました。早い機会に『戦争についての記録』を残しておいてほしいとの声が高まつて参りました。そこで、北伊予の伝承 第V集では『戦争』をテーマに取り上げました。

昭和二十年八月十五日、満八歳の私にも忘れることの出来ない一日となりました。その日は朝から、前庭にある「防空壕」の改修作業に家族総出で汗を流していました。ラジオからは、「正午より重大放送がある」から、よく聞くようにと、繰り返し繰り返し伝えていました。「防空壕」の改修作業も終り、汗を拭いてラジオの前に全員が集まつて、放送を待っていました。

「玉音放送」、初めての天皇陛下の声を聞くことが出来ましたが、内容は敗戦を伝えるもので、全国民が啞然となり、しばらくは声も出ませんでした。

第V集では、この終戦までのことを取り上げました。地域の古老に尋ねても、もう記憶が薄れたようなこともあり、編集も大変な苦勞でした。

資料を御提供下さった方々、御協力下さった方々、編集委員の方々に深甚なる感謝を申し上げます。

平成十二年三月

松前町東公民館長 水口 憲 三

目次

一 戦争

1	太平洋戦争従軍者名簿	1
①	天皇制下の軍人精神の基本	1
②	兵役制の概要	1
③	北伊予村からの出兵状況	2
④	太平洋戦争従軍者名簿(地域別)	2
2	地区の災害	8
①	松山空襲の余波災害	8
②	被害調査図	9
③	空襲の思い出	10
3	銃後の守り	11
①	国防婦人会	11
②	愛国婦人会	12
③	在郷軍人会	14
④	開拓団と義勇軍	15
⑤	学徒動員	17
⑥	戦争を省みて	18

二 子供の生活

1	子供の遊び	20
2	子供の唄と衣服や服装	22
3	学業について	25
①	学校生活	25
②	子どもたちの戦い	28
③	不自由な生活	29

三 生活

1	終戦前までの動植物の生態について	30
①	当時の自然環境	30
②	鳥類について	30
③	川に生息する虫や魚介類等について	31
④	虫類等について	32
⑤	その他の小動物について	33

2 物質の統制

- ① 『ほしがりません勝までは』
- ② 戦中・戦後の食生活
- ③ 戦争末期の食料事情について

34 34 35

3 農家の生活（大正と昭和の初期）

- ① 伊予絣の機織り
- ② 農村労働者
- ③ 農村の燃料
- ④ 隣つき合いと日常生活
- ⑤ 冠婚葬祭

37 37 38 38 39

四 農業

1 営農上の習慣

- ① 単位
- ② 奉納額「農耕図」

41 43

2 農耕作業（戦前）

44

3 農業住宅

48

4 農家の家計

51

五 その他

1 忠魂碑の修復

53

2 出征風景

54

3 特攻隊員の手記（部分）

55

※臨時召集令状

56

4 年表（昭和初期～終戦まで）

58

5 戦時唱歌（軍歌）

59

6 北伊予村区画図

60

一 戦争

1. 太平洋戦争従軍者名簿

北伊予村からの戦争参加者名簿

① 天皇制下の軍人精神の基本

軍人勅諭（M十五年）……中の一部……

○ 我国の軍隊は世々天皇の統率し給う所にぞある……



○ 朕は汝等軍人の大元帥なるぞ……中略……汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を国家の保護に尽さば……

○ 我国の威烈は大に世界の光華ともなりぬべし……

○ 只々一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽より重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ……

○ 下級の者は上官の命を承ることは実は直に朕が命を承る義なりと心得よ……

大日本国憲法（M二十二年）……中の一部……

○ 大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す……

○ 天皇は神聖にして侵すべからず……天皇は陸海軍を統帥す……

○ 日本国民は法律の定むる所に従ひ兵役の義務を有す。

教育勅諭（M二十三年）……中の一部……

○ 一旦緩急あらば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし

② 兵役制の概要

兵役法では徴兵の義務範囲を十七才～四十才の男子としているが、一般的には二十才で徴兵検査を受けて甲・乙・丙種に選別される。甲種合格者は後日入営通知が郵送され現役兵としての所定の教育訓練を受ける。そして除隊すれば、予備役に

登録され後日の召集令状を待つ身となる。

しかし、日中戦争突入後の戦線は拡がるばかりで、膨大な兵員投入が必要となり、無限界に近い増徴に逼られるに至り、数次に渡る関係法の改正で、遂には丙種合格者、年齢も四十五才まで更に検査前の十七才の若者まで召集範囲が拡げられるに至った。

③ 北伊予村からの出兵状況

その結果、総計七百十五名（一軒に一人）もの兵隊が当農業村から徴集されていた。各人戦った場所や時期はそれぞれ違っていたけれど、彼等は皆「軍人は男子の名譽」と心に誓い、祖国の勝利を信じて精一杯戦ってきたのでした。ただ現実には残念な敗戦となってしまった。その上二百二十九名もの多くの方を遺骨でお迎えせねばならぬ運命と共に……。

後に残された者たちは、今この英霊の前に跪き「今後は戦没者の墓碑を増増するような過ちは絶対二度と繰返さない、これがためには、私たちのこれからの生き方を変革してゆかねばならない決意でいることをここにお誓い申し上げる次第です。」

太平洋戦争従軍者名簿（平成十一年十二月現在）

【徳丸】一三八名

◎印は戦没者氏名を示す

◎伊賀上 喜孝	◎伊賀上 信良	◎遠藤 貞行
◎加藤 朝一	◎加藤 幹三	◎加藤 春五郎
◎門屋 友春	◎川端 政一	◎門屋 正善
◎木下 哲郎	◎木下 君造	◎後藤 玉男
◎佐藤 義朝	◎末岡 清三	◎関谷 正
◎仙波 正三	◎田中 秀雄	◎佃 彰
◎佃 利春	◎豊島 先男	◎徳野 正春
◎永井 開作	◎永井 寅之助	◎林 憲正
◎松本 清	◎八束 裕隆	◎八束 熊次
◎八束 保	◎八束 裕資	◎八束 正雄
◎八束 正英	◎八束 正幸	◎八束 兵藤
◎弓立 薫	◎弓立 茂	◎弓立 正巳
◎渡部 勝経	◎遠藤 頼賢	◎遠藤 正之
◎伊賀上 勝正	◎伊賀上 清	◎伊賀上 静雄
◎伊賀上 多市	◎伊賀上 忠雄	◎伊賀上 俊雄
◎伊賀上 正夫	◎伊藤 精彦	◎伊藤 楨男
◎遠藤 賢爾	◎遠藤 基行	◎遠藤 重行
◎大西 正雄	◎小野 末雄	◎加藤 和良
◎加藤 栄	◎加藤 八郎	◎門田 政典
◎門屋 岩次	◎門屋 劔	◎門屋 勝見

※以上三十九名

渡部正雄	弓立正	弓立正	弓立直	弓立矢	弓立桂	八束玉	八束一	八束篤	松本義	本貞義	野貞男	永鬼之助	豊島源慶	田中芳邦	関谷茂夫	後藤正健	木下休	木下胤海	木下勇	川端正	門屋稔	門屋末	門屋繁雄
渡部良信	渡部悦夫	弓立正	弓立直	弓立鉄	弓立参	八束正	八束繁	八束修	松本義	本吉幸	林一正	永井末	永井茂成	田中義和	仙波文治	後藤正史	小池恒夫	木下博信	木下正馬	川端千一	門屋義明	門屋常五郎	門屋庄太郎
渡部浪夫	渡部正	弓立兵	弓立恭	弓立三	弓立智	八束勝	八束兼	八束福	安永好	松本男	林章正	永井吉美	永井多聞	嶋本繁一	田中龜勝	篠崎正明	後藤静雄	木下泰雄	木下貴	木下悦太郎	川端稔	門屋昇	門屋丈作

神崎	加藤雅猛	大政敦夫	井ノ口一男	◎本田英雄	◎山本芳弘	◎宮脇幸文	◎本田肇	◎本田忠	◎本田利夫	◎藤田丈也	◎平井義	◎武智巖	◎城戸國太郎	◎加藤春雄	◎加藤忠義	◎加藤茂雄	◎大政正美	◎井ノ口勝弘	◎本田藤次郎	【中川原】一〇九名	弓立	関谷耕一
多賀夏孝	河合辰美	加藤潔高	稻田先長	◎本田多光	◎弓立好	◎三好正	◎本田多	◎本田重	◎藤田能	◎藤田重	◎武智輝	◎合田玉	◎加藤宏	◎加藤利	◎加藤四郎	◎大政千代藏	◎大政周次郎	◎窪田信太郎		八束貞常	八束含	
武智正男	窪田義直	加藤徳之	大政勝義	◎弓立好	◎三好正	◎宮脇一郎	◎本田利雄	◎本田重忠	◎藤田五郎	◎藤田克	◎合田正行	◎城戸敏	◎加藤敏	◎加藤直	◎加藤國勝	◎大政助義	◎井ノ口平八郎			※以上九名	篠崎正明	

◎中野傳	◎弓達友三郎	◎宇都宮茂	◎土居繁隆	◎松岡千太郎	◎水口坂義	【出作】四九名	山本磯秀	松嶋清一	本田忠平	堀内良謨	武智明	合田正	加納信光	加藤幸晴	加藤良久	加藤清一	井ノ口照一	本多良光	山本覺	本田利八郎	本田正明	本田靖	武智正憲
◎弓達延昭	◎津本享	◎伊賀上貞男	◎安東次郎	◎松岡數馬	◎二神米市		弓達隆一	水本俊雄	本田幸男	本田智	藤田林	合田光夫	窪田高明	加藤文雄	加藤猶也	加藤善一	井ノ口俊平	山本一夫	中村正一郎	三好義夫	本田敬	本田清	武智通有
※以上一七名	◎中野樂	◎中野昇	◎土居芳卓	◎土居久徳	◎塩崎晴美		※以上六二名	宮脇謙	本田義高	本田一馬	藤田三敏	高田千春	窪田静男	加藤伴次	加藤萬藏	加藤貞男	大西恒和	山本庫一	大政百合夫	三好進	本田好男	本田忠蔵	藤田重雄

◎加藤高之	◎小笠原憲明	◎福岡武	◎深沼親壽	◎橋本義直	◎西岡義輝	◎西岡義明	◎高石英修	◎高石保一	◎片河義光	◎加藤義學	◎池内學	【神崎】二二七名	中野芳明	土居和臣	野本敏郎	神野正	弓立茂夫	野本宏高	西村宏夫	串宮輝夫	西村英安	西村忠厚	西村博
◎高石義雄	◎小原孫市	◎大西茂勝	◎栗田廣司	◎藤岡常盤	◎野村重信	◎西岡愛次郎	◎土居滋之	◎高石滿喜男	◎合田安吉	◎加藤壽一	◎奥村正明		西村正	関谷由雄	野本庄二郎	神野義之	中西貞孝	西村正強	神野一	西村之	西村一郎	高市慶久	西村博明
◎土居五郎	◎岡本秀樹	◎向井末男	◎一色要章	◎藤岡四郎	◎野本義孝	◎西岡義浩	◎中神正	◎高石渡	◎高市茂	◎加藤西一	◎大西男	※以上三二名	二宮貞光	神野義雄	神野幸夫	神野時種	西村和幸	西村重	西村榮	西村雄	戸田明	西村隆夫	

池	高	小	山	高	宇	土	白	仲	伊	德	高	西	藤	西	橋	越	水	武	野	野	◎	◎	◎
内	石	池	下	市	和	居	石	神	賀	永	石	岡	岡	岡	本	智	口	智	本	本	池	岡	岡
一	慶	滿	元	作	義	義	義	直	孝	平	明	清	明	信	正	雄	政	美	猛	郎	守	郎	厚
高	延	雄	昭	長	一	夫	人	桂	司	雄	平	明	清	明	猛	雄	政	美	猛	郎	守	郎	厚
水	池	松	小	高	野	高	白	中	深	德	宮	深	岡	竹	橋	仲	奥	奥	合	野	◎	◎	◎
口	内	田	田	市	村	石	石	村	沼	永	内	沼	本	田	本	神	村	村	田	本	橋	松	西
常	春	藤	寬	義	悦	廣	精	一	博	秀	末	壽	徹	林	太	眞	健	輝	主	稔	訓	田	岡
豐	男	茂	吉	一	夫	一	一	一	一	雄	廣	明	惠	巖	郎	市	夫	國	計	平	進	一	春
小	池	松	小	高	加	小	土	高	大	汐	水	大	西	西	橋	西	越	水	片	野	◎	◎	◎
田	内	田	田	石	藤	田	居	市	西	見	口	西	岡	岡	本	岡	智	口	河	本	◎	◎	◎
原	一	一	次	末	英	英	格	雄	郎	藏	夫	計	松	市	勝	勝	廣	男	渡	勉	池	間	正
四	章	三	勉	郎	平	光	壽	格	雄	郎	藏	夫	計	松	市	勝	廣	男	渡	勉	池	間	正
郎	章	三	勉	郎	平	光	壽	格	雄	郎	藏	夫	計	松	市	勝	廣	男	渡	勉	池	間	正

※以上四名

佐	伊	佐	日	大	元	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	水	窪	池	小	加	石	山
伯	賀	伯	野	政	木	水	元	友	渡	伊	松	白	大	白	岩	鶴	口	田	内	田	藤	橋	崎
調	要	末	寬	弘	三	太	勇	久	綱	時	計	清	豐	夫	早	八	建	信	福	練	賢	年	
町	柳	佐	日	大	濟	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	六	保	重	美	平	三	春	
田	原	伯	野	政	川	大	佐	大	政	岡	水	西	久	濟	大	名	山	高	池	加	石	池	
司	雨	岩	數	市	要	一	明	正	雄	靜	敦	清	堯	涉	庫	下	市	藤	内	藤	橋	內	
三	勇	勲	男	市	要	夫	文	正	雄	靜	敦	清	堯	涉	庫	宗	純	寬	長	龍	壽	春	
白	久	伊	伊	松	濟	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	小	水	池	高	三	池		
石	津	賀	賀	田	川	松	元	栗	柳	峰	橋	佐	大	大	笠	笠	口	内	石	好	內		
正	那	上	上	忠	三	田	木	田	原	岡	本	伯	政	政	原	原	義	章	義	篤	美	修	
勝	男	旻	明	夫	介	正	一	一	一	一	一	一	一	一	一	明	一	夫	海	美	修	修	

※以上二八名

※以上八三名

金町	○町	○嶋	○金	○森	○篠	○森	【横田】	日	西	岩	松	西	村	大	大	濟	大	岩	大	水	白
子田	田	田	子	種	崎	川	五十九名	野	村	崎	田	影	上	西	政	川	政	崎	西	口	石
欣		作	定	義	正	明				政	福	政				義	貞	則	清	算	
市勇	霞	實	雄			郎		貢	東	計	卓	美	勝	武	茂	斎	一	一	明	茂	高
松町	○宮	○篠	○松	○水	○德	○松		佐	大	水	白	池	久津那	大	松	大	水	佐	佐	村	
田田	脇	崎	田	口	本	田		賀	政	口	石	田	元	政	田	政	口	伯	伯	上	
忠千代	重太郎	文男	茂則	宇積	武夫	文雄		惠		義	一	夫	清	一	也	一	也	弥	昭	吉	
一									善	明	夫							年	一	夫	
篠金	○篠	○德	○嶋	○篠	○金	○金		日	佐	水	濟	相	久津那	大	西	水	大	久津那	池	水	
崎子	※以上十八名	本	田	義	義	政	※以上五十八名	野	賀	口	川	原	安	政	村	口	善	治	道	茂	
幸鶴		健	榮	義	義	一		春	茂	太郎	裕	志	男	一	好	治	雄	治	雄		
雄吉		三	利	廣	光	義		郎													

渡部	向井	二宮	田中	高市	高市	栗原	栗原	阿部	橋本	川下	【大溝】	山本	篠崎	篠崎	篠崎	宮田	森川	日野	松田	松田	篠崎	日野	篠崎
喜利	一夫	男	大喜夫	哲郎	國夫	明進	秀雄	秀清	義矩	晴	三四名	一好	政一	幸一	福美			修三郎	鼎計	馬太郎	一郎		
渡部	向井	二宮	田中	高市	高市	栗原	栗原	川下	向井	高市		重松	山崎	篠崎	岩崎	岩崎	上岡	日野	重松	松田	篠崎	篠崎	篠崎
君文	清志	秀雄	正信	健一	正則	忠明	秀明	忠一	静夫			光義	光敏	敏雄	巧雄	雄男	桂男	千活	章男	一			
渡部	山崎	升田	田中	高市	高市	栗原	栗原	川辺	田中	義章	※以上五名	※以上四一名	松田	篠崎	篠崎	金子	山崎	德本	山崎	松田	松田	日野	
信澄	澄照	義一	米夫	重秋	安貞	重雄	雄					修肇	久房	明雄	清三	司茂	章一	鯉	猛				

◎池内徳英	◎池内義徳	◎稲垣久次郎	◎永田五六名	◎向井恵	◎村上邦男	◎大政正信	◎池原一市	◎松野安吉	◎大西守	◎楠本良平	◎古谷保男	◎中村正男	◎夏井一	◎藤野庫重	◎澤田信重	◎渡部正男	◎向井正男	◎中村英武	◎池田正武	◎村上義和	◎夏井三千介	◎澤田明利	◎渡部義孝	
			◎大西達明	◎二宮源吉	◎福嶋森夫	◎池原太郎	◎渡部光馬	◎中村保	◎中村一夫	◎中村重一	◎福嶋貞三郎	◎夏井繁政	◎夏井二郎	◎澤田章	◎澤田英一	◎池原英一	◎水口清	◎夏井憲	◎中村重巳	◎小笠原順一	◎大政利雄	◎澤田勇雄	◎三好照尾	◎渡部宗雄
			◎村上壽馬	◎吉岡春雄	◎藤野徳重	◎池原力松	※以上四名																	※以上二九名
			※以上四二名																					

◎稻垣純	◎萩野俊	◎三好進	◎三好良金	◎和田義	◎相原貢	◎黒田利治	◎中野要	◎早瀬政夫	◎早瀬潔	◎三好博孝	◎三好亮	◎三好清	◎和好清	◎和田巖	◎森下嘉久	◎早瀬明夫	◎池内一郎	◎高市太郎	◎竹田清秋
◎稻垣英夫	◎早瀬信	◎三好五郎	◎三好良一	◎和田能知	◎稻垣定義	◎萩野純一	◎早瀬修一	◎早瀬勇	◎三好重光	◎三好稔	◎三好広	◎三好計	◎三好弘	◎三好義	◎三好忠	◎三好節	◎高市敏夫		
◎西村徹	◎福島義朗	◎三好包	◎三好繁雄	◎以上一七名	◎竹田盛秋	◎早瀬一	◎早瀬清	◎三好春夫	◎三好吉綱	◎三好直	◎三好篤	◎三好秀夫	◎萩野彦一	◎三好正信	◎三好正春	◎竹田孝明			
																			※以上四三名

① 松山空襲の余波災害（回想）

松山が空襲だという父の声で、ふと目が覚めたが電灯もついていないのに部屋の中が明るく、よく見えたような気がする。松山上空が真っ赤に染まっていたが、何時頃だったか時計を見る余裕はなかったのだろう。平素から用意をしていた避難用の荷物を持って外に出ようとすると、父が「皆が避難をしたらいいかん、俺は家を守る」と母に話していたのを聞いた。私も父と一緒に家を守ろうと思いい外に出てみると、前のサトギ畠（砂糖黍）の中に五、六人が身を潜めている、聞くと松山空襲の避難の為のことだった。

丁度、その時家の西側を通る上り列車があつた、B 29が一機だけ列車に向かって飛来するかのように見えた。そして列車が重信川の北土手にさしかかったとたん、ピュン、ピシャン、ヒュンと聞こえる音に混じって、キーンと金属音がして、箸くらいなものが落ちて来た、それは不発の焼夷弾であつたので命拾いをした思いであつた。サトギ畠に避難をしていた人たちがいなくなつたのも全く気づかなかつた。

その頃、北の方向からは炎が見える、田植えをして間もない水田のここからポロ、ポロと気持ちの悪い炎が水中から上がり、稲まで燃えていた。その時「隠居が燃えよる」と言つて父は走りだした。私も後に続いて走りだした。隠居家の生け垣が燃えていたのだった、父と

竹箒で消そうと火を叩いたが、火が飛び散るだけだった。幸い堰止にしていた濡れ簾を被せて消し止めた。東隣の大政さん宅の風呂場の北側も燃えているが人は居ない様子なので、父と二人で消火した。北側の水田からは十ヶ所ほどでポロ、ポロと焼夷弾が燃えている。更に東の大政島太郎宅の屋根の中央付近からも炎が一つみえる。「子供は危ないから帰れ」と父に言われて家に帰った。その時の様子は五十年たった今でも心に焼き付いて離れない。

数日後、組長さんから魚の配給があるとの連絡があつたので、弟が魚の受給に家を出て、「空襲」の叫び声と同時にボカンという凄まじい音がして、グログロと地鳴りがした。外に出てみると家の東側の畠に三メートルほどの大きな丸い穴が空いていた。父母は田の草取りで不在だし不安で何もできなかった。この時は、爆撃と機銃掃射があり、草取りの最中の父母は身動きが出来ず、グラマンが二、三回旋回して来たので、射撃から逃れるために川の中で首だけを出して身を伏せていた。グラマンが飛び去ってから家族の無事を確かめるために急いで帰って来た。そして父母に配給のことと、爆弾投下の様子を話したのは、つい先日のことであつたような気がするが、もう五十数年の前の出来事となつてしまった。

その時に語られた父母の言葉や、安心した時の父母の顔は生涯忘れられません。 本田 悦子記（旧姓、大政）

② 地域の被害概要



空襲時には、避難袋（貴重品や携帯食）を持って防空壕に退避し、そして飛行機の飛び去るのを待っていた。米軍のグラマン搭乗員の顔が見えるほどの低空飛行が多かった。（横田では防空壕を作る際に和鏡が出土している）

- ・爆弾投下地点（一カ所か？）
 - ・焼夷弾投下範囲は鉄道線路から東の地域民家に投下された数は二個か？
 - ・焼夷弾の投下された総数は二〇〇〜三〇〇個と推定する。
 - ・機銃掃射範囲並びに被害家屋
 - （銃撃をうけた方向は不明だが東西方向やも：）
 - ◎ 北伊予地区の被害概要等
 - ・神崎 駅の周辺が爆撃を被る
 - ・横田 下の方（西）で列車が銃撃される
 - ・永田 農協倉庫と民家が銃撃される（実害はなし）
 - ・その他 略す
- ※ 空襲に備えてこの民家でも、簡易防空壕を設置していたが、ほんの気休め程度の価値しかなかった。木材と板で構成され土でその上を覆っていた。なお壕内には水が溜まって、蚊の発生に悩まされた。

③ 空襲の思い出（中川原座談会より部分抜粋要約）

・昭和20年7月26日午後10時頃、B 29一二〇機による焼夷弾と爆弾の投下によって、松山市内はほとんど全焼した。そのうちの二編隊（約二〇機）が貨車の引つ込み線に止めてあった、多数の貨車に焼夷弾を投下した。そのとばつちりを受けて二軒の家屋に焼夷弾が命中した。

・幸い人々の消火作業で一軒は全焼を免れた。

・松山空襲があつて、もう空襲は無いだろうと思つていたら、8月9日の朝、警報も無いのに突然バリバリという機銃音が聞こえた。外に出てみると、柿の太木の小枝が落ちてきた。（米軍機二機が空中接触して墜落）

・防空壕から出て家の様子を調べたら、門の柱が二ヶ所銃弾で削られ、ダヤ（牛小屋）の腰板には穴があき弾が転がつていたが、牛は無事だった。母屋の庇の瓦は割れて畳の上まで弾が貫いて十数個の弾が転がつていた。近所の家は総て被弾した。また一軒おいて西隣りに疎開していた婦人は被弾して重傷を負い、後に亡くなられた。

・P 51の銃弾では、曳光弾による火災が発生した。消火活動は、米軍機の反転する隙間を利用して、地域住民と寺に駐屯していた兵士で消火に当たった。屋根は藁で燃えたが、骨組みは残り復旧は早く出来た。

・屋敷の外庭に小型爆弾が大穴をあけ、その破片が門柱に刺さったり、更に隣接する屋敷の牛小屋に飛び散り、牛の内臓を損傷したりした。牛は出血多量で間もなく死

んだ。

北伊予駅被爆（元青年学校校長故三好 正氏の手記より部分抜粋要約）

り部分抜粋要約）

松山空襲の翌々朝（七月二八日）から駅が攻撃目標になったのは、松山空襲で列車の給水施設が破壊され、北伊予駅で給水をするようになり、多くの列車が停車するために目標にされたのだろうか？

（給水は西側の泉より、消防ポンプを利用して）

・一発は駅の西側の民家の牛小屋を直撃する、飼牛は爆死をした。

・一発は駅の西のポンプ小屋に命中し、施設を微塵に粉碎した。この時、枡形のコנקリート製の水溜に避難をしていた駅員は、奇跡的にも助かった。

・一発は農協の一号倉庫の南西の隅をえぐり、線路の西の畑に投下された。

・一発は農協の東側のコンクリート塀の上を削り内庭に落下、炸裂したが人命には被害はなかった。

・一発は民家の西の間に直撃するが、家族は布団をかぶり隣の間にいたので、全員無事であった。

・一発は駅前の民家の薪を燃やすが、間もなく消火した。
・徳丸にも銃撃で火災が発生したり、小型爆弾が十数個も落とされ、堆肥舎の土塀に幾つもの破片が突き刺さる。また水田には二坪程が背丈程も掘れて周りの稲が焼かれていた。（この項、渡部国蔵氏の手記より）

3 銃後の守り（国防婦人会を中心としての活動）

村では村長、地区では区長が責任者となり実行組合長（現在の組長）を係りの要として諸活動の実践に取り組んだ。情報伝達は隣組を作り回覧板を廻していた。

そのころ昭和十五年に作られた歌に、

「隣組」

とんとんとんからりと隣組

格子を開ければ顔なじみ

廻してちょうだい回覧板

知らせられたり知らせたり

① 国防婦人会

昭和十一年に国防婦人会が発足し各支部を中心に諸活動をして来た。

一、勤労奉仕団として、陸軍病院（現在の松山城二



之丸公園）に行き洗濯、繕い物など一日中の作業であった。

二、重信川の砂利運搬、トロッコ車に砂利を積み菊間方面の線路補修工事作業を婦人会で分担して実施した。

三、出征兵士農家の米・麦収穫作業手伝い。

四、農繁期の共同炊事、託児所の開設

五、出征兵士に千人針を縫って送り、兵士はこれを腹巻きにして戦場へ赴き、無事に帰ってくことを願った。虎は千里の道を駆けて帰って来ると伝えがあるから寅年の女性は自分の年齢の数だけ縫った。

出征兵士を送る歌が作られた。

わが大君に召されたる生命栄光ある朝ぼらけ
讀えて送る忝億の歓呼は高く天を慟く

いざいけつわもの日本男児

六、出征兵士の武運長久を祈るため組で参拝幟を作り毎日お宮詣りをし、次々と家送りをしていた。

七、出征兵士に慰問袋を作り中へは日用品・手紙・写真・お守りなど入れ、銃後の有様を知らせた。

八、防空壕を各家または隣組で掘り、敵機空襲から生命を守る。

九、白壁に黒く迷彩塗りをして、敵の目をだまし家を守った。

十、防火防空のため夜間家から光を出さないよう電燈の傘に覆いをして防空にそなえた。

十一、窓ガラスに紙はりをしガラスを爆風から守っていた。

十二、各家に防火バケツ・砂袋を備え非常事態を固めた。

十三、再三のバケツ防火訓練を実施。モンペ服姿であった。

十四、代用食調理講習会を実施し食糧不足を補った。

② 愛国婦人会

戦争にかかわる婦人会の歴史は古い。明治33年の中国における義和団事件に出兵した兵士の救済に、上流社会の婦人が愛国婦人会と称して活動している。翌34年に奥村五百子を中心に正式に愛国婦人会が結成され日清・日露戦争でも経済的な軍事援助を行っている。当時、北伊予村には一四五名、松前村には七八名、岡田村には一七名の会員がいた。

昭和初期の満州事変・上海事変には、家庭教育、社会奉仕（主に軍事援護）を目的とした地域婦人会が誕生している。

鶴吉婦人会の例をみる。（昭和六年二月七日起）

会則（抄）

第一条 本会ヲ鶴吉婦人会と称ス

第二条 本会ハ婦人品性ノ向上ヲ計リ消費ノ節約ヲ

実行シ社会ノ改善ニ努メ相互扶助・精神ヲ厚クスルヲ以テ目的トスル

第四条 本会員ハ主婦又ハ二五才以上ノ婦人ニシテ当部落ニ在住スル者ヲ以テ組織スル

第五条 本会ハ北伊予村婦人会ト聯絡シ議會ヘ評議員ヲ二名出席セシムルモノトス（以下略）

会長、副会長、評議員は婦人であるが、顧問は村会議員、区長の男性二名となっている。その下に各組から二名の理事を出している。当時の組合員七三名。

婦人会の活動

満州事変以後日本の大陸進出への気運はますます高まるとともに、国策はすべて軍事力増強に向かつていった。

昭和九年『皇国婦人の自覚』より各種婦人会、地域婦人会は全国規模として大日本国防婦人会に含まれることになる。当時会員五四万人と言われたが、次々と組織は拡大され翌年には一〇〇万人に達した。別組織の愛国婦人会も会員二〇〇万人とふくれ上がっていたが、両方に加入していた者も多い。

大日本国防婦人会北伊予村分会の活動をふり返ってみる。

《会則》

第一条 本会ハ拳国皆兵ノ精神に基キ日本婦徳ヲ發揮シ

日本婦人トシテ護国ノ大義ヲ実践履行シ国防上
ニ質スルヲ以テ目的トスル

第四条 本会ハ松山聯隊区司令官ノ指導監督ヲ受クルモ
ノトス

第五条 本会ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

一、心身トモニ健全なる子女ヲ教養シ以テ護国ノ任
ヲ遂行セシムルコト

二、皇軍將兵并ニ其ノ家族傷痍軍人及ビ戦没者ノ遺
族等ニ対スル後援慰恤ノ誠ヲ致スコト

三、一旦緩急アル場合ニ善処スル為国防思想ノ涵養
及ビ必要ナル精神的教養并訓練ヲ遂ゲレムルト共
ニ家庭救済ヲ確立シテ国家経済ニ寄與セシムルコ
ト

四、其ノ他本会ノ目的ニ適合スル事業 (以下略)

へ宣言

一、世界に比なき日本婦徳を基とし益々之を掲揚し悪風
と不良思想に染まず国防の堅き礎となり強き銃後の力
となりませう。

二、心身共に健全に子女養育して皇国の御用にたてませ
う。

三、台所を整へ如何なる非常時に際しても家庭より弱音
を挙げない様に致しませう。

四、国防の第一線にたつ方々を慰め其の後顧の憂を除き
ませう。

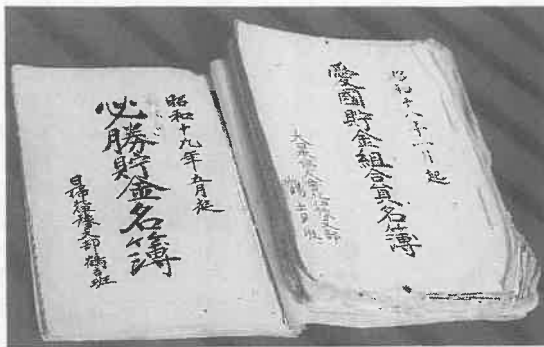
五、母や姉妹同様の心を持って軍人及び傷痍軍人并ニ其
遺族の御世話を致しませう。

六、一旦緩急の場合慌てず迷はぬ様に常に用意を致しま
せう。

このような非常にきびしい会則に強制されながら会員
は白いエプロン(割烹着)に「大日本国防婦人会、北伊
予分会」のたすきがけで出征兵士の見送り、遺家族の慰
問、勤勞奉仕、防空演習には率先参加し国策に協力し
た。

戦地に送った慰問袋、激励の手紙には、遠く南洋や中
国大陸に戦う將兵からはお
礼の軍事郵便が届くなど、
戦線と銃後の絆をたもちな
がら活動を続けていった。

前線の戦局がきびしくな
るとともに銃後の生活も一
層きびしくなりエプロンで
は活動できなくなった。働
きやすいモンペ姿となり、
昭和十七年「大日本婦人会」
に一本化された。



③ 在郷軍人会

軍籍を有する者は、召集令状が来れば命ぜられる日時、到着地、召集部隊に必ず行かなければならない。各地区を出発する時は区長から激励のあいさつがあり全員が見送る。北伊予駅では多くの召集兵が村長から激励のあいさつを受け、小学生も日の丸の小旗で見送り、汽車が中川原鉄橋を渡り見えなくなるまで見送った。

戦時唱歌として多くの歌は遠く離れた戦地と故郷の方たちの心の連帯に役立たせた。明治から昭和二十年の終戦までに四十の唱歌が作られた。

大東亜戦争で国民は、たたき込まれた時代を歩んだ。昭和二十年八月十五日の敗戦となった。

戦争中は軍備の充実を計り武器の整備は勿論のこと、国を挙げて国民皆兵の姿であった。中でも在郷軍人会は陸軍（砲兵、工兵、歩兵、騎兵、航空兵課）、海軍（巡洋艦、駆逐艦、戦艦、航空母艦）、航空機、兵員を常備して国の戦力を固めた。予備兵が指導の中心をなしていた。

現役兵は二ヶ年の就任で満期除隊となり郷里に帰り、予備軍人として登録した。国民の男子は満二十歳で徴兵検査を義務化し、在郷軍人となり甲乙丙の種類分けし、甲種は現役兵とし二ヶ年務め除隊後在郷軍人となる。乙丙種の者は徴兵はなく在郷軍人となった。

市町村毎に分会を結成し退役軍人が階級に上がって分



昭和十三年 北伊予村役場 所伝状礼集召

会長を務め、毎年陸軍記念日に全員集合し小学校の運動場で徒歩訓練、集団教練を実施した。郡市に連合会を組織し県単位に聯隊区があり一大演習も実施、在郷軍人は殆ど訓練を強要された。常備兵力はわずかでも在郷軍人が戦争となれば召集され実践要員として任務を果たした。すべて国の方針に有無を言わず従わせた。また、徴兵検査を逃げて投獄された人もあった。軍の動向によって在郷軍人の緊急訓練があった。小学生から大学生に至るまで在郷軍人の中から選ばれた教官が軍事訓練を実施することになり、男女を問わず戦場の戦いを教えた。

敵の上陸作戦に備えて年寄り婦人子供に防空壕ほりを強要した。その指導には在郷軍人が当たり国土の護りを担った。国の方針のみが伝えられ、情報を知る新聞も制約があり、上司の号令に在郷軍人も国民も振りまわされた。

我が国が歩んだ過去を二度とくり返さないよう国民自身の善良な判断を常に心得ていることが大切である。在郷軍人の悲しい想い出を、日本の若者たちに伝えたい。

④ 開拓団

昭和初めの頃から大陸進出に活路を求め海外移住を推進した。特に満州に向けて力を注いだ。併せて軍隊を進駐させ治安の確保に努めた。移住民と原住民との間で常に争いが絶えなくて満州事変と拡大した。国は国家総動員法を発して満州移住を国策として打ち出し行政機関を通して強力に推進することとなった。県市町村はこの国策を議会で議決し、農民の説得に努めた。これが開拓団の誕生である。

一方、満州国を建国し関東軍を治安維持の任務に当たった。事変は拡大し東亜共栄圏全土に及び物資の補給が困難となったため、現地生産に力を入れ移住民を増加し、



満州北部開拓団出発団

その数約三千万となった。

伊予郡にも応募の要請が強く、北伊予村にも開拓団の要請応募が行なわれた。当初は応募する者は無く、村長は各地区の有志を説得、懇願し有志の率先を促し国のため村のためと繰り返し決意を迫った。その結果、各地区から数戸の移住者が決まった。出発までの間、地区の人たちは区長を中心

として送別までの準備に大変であった。

伊予郡では開拓団編成に総勢二百名に余る団員となった。北伊予村、南伊予村、北山崎村の三ヶ村で編成し団長は北山崎国民学校の校長を推し、団の幹部は各村の名士が就き、昭和十八年に現地に出発し生産活動に勤んだ。派遣先は南満州の鉄道沿線で気温も暖かい所で治安も良く地質も肥よくで穀倉地帯で生産には最良の土地であった。

一方、北満州のソ満国境に近い開拓団は厳冬の寒さは想像外で、青壮年とは違う老人や子供にとっては越冬は大変だった。国策であり国のため、村のためと是非の決断をと懇願された開拓団だと覚悟はしていたが暖かさに慣れた者にとって、北満の生活は大変だった。しかし、彼らは開拓の意義と使命に燃えて励んだ。

昭和二十年八月、ソ連の参戦でソ満国境に近い鉄道と開拓団を最初に爆撃し砲火を浴びせた。

敗戦国となると開拓団はわずかの身廻り品と食糧を持つて避難し日本に帰ろうと急いだ。現地人の盗難に遭う者、ソ連軍の虐殺に遭い全滅する開拓団もあった。生き残るわずかの者は避難する途中、食糧も無くなり野草を食べ命をつないだ。ソ連軍の追撃は続き自決する者、母は我が子を刺し殺し自分も自害する者、生き続け避難する者は次は我が身かと思いつつ、いたましい有様はむごく痛ましい地獄そのもので語るに忍びなく涙なくして語

れない。我が子を己が手で殺さなければならぬ母親の心情は如何に狂気に近いと思つても出来ようか、恐怖の中、鬼畜生と化したと思つた。このような状態に至つた原因は何か、このような犠牲は、二度あつてはならない。中国に取り残された残留孤児の心境は想像に余りある。開拓団、鉄道員在留邦人で国境や各地で勤め終戦直前まで砲火を受け九死に一生を得て引揚中は全員同じ団となり日本に帰つた。

資料提供 加藤 善 一 氏

満州開拓義勇軍に参加して

神崎 池内 清内

私が十六才の時、今でいう中学二年生。(当時の高等小学校二年生)の頃は第二次世界大戦も末期の状態でありました。

当時の日本は食糧難であり、何を買うにも切符制でした。主食はさつま芋の乾燥したのに米を少しまぜた「芋めし」の毎日でした。

そこで受持ちの先生が

「現在日本は非常に食糧に困っている。国のため、食糧増産の戦士として、満州開拓青少年義勇軍に行かないか」と言われ、私は志願しました。昭和十八年二月十七日でした。

尋常高等小学校、高等科2年在学中、卒業を前に北伊

予小学校全校生徒に「万歳・万歳」と見送られ、北伊予駅を後にしました。松山の県庁前に、百八十名の者が集まり、愛媛中隊を編成しました。

そして茨城県の内原訓練所に入所しました。訓練所には全国から、かなりの訓練生が入っていました。そこで五十日間訓練を受けました。杉皮・板張りの兵舎で「日輪兵舎」と言っていました。

それから新潟港より朝鮮の羅津港に着き、列車で満州の牡丹江の訓練所に到着しました。昭和十八年の五月の初めでした。

作業は満州国の開拓であり、大平原を相手に土おこしなどをし農作業が主でした。毎日毎日赤い夕陽に照らされての重労働です。冬は零下四十度の寒さの中軍事教練や伐採作業などが続けられました。

昭和二十年に入ると実戦同様の教練になり農作業は一切ありませんでした。六月に入りソ聯が参戦し、満州の関東軍の主力は南方へ征つていて、満州は我々開拓義勇軍の先輩たちが抵抗しました。けれど全滅でした。

あの辛苦は言いようがありません。もう戦争はこりりです。

⑤ 学徒動員

昭和十八年六月二十五日、戦争学徒動員体制確立要綱決定。

昭和十九年二月二十五日、決戦非常措置要綱が閣議決定（学徒勤労働員の強化・女子挺身隊の強化）を受けて相川知事は二月二十九日国民勤労働員を設置した。

昭和十八年四月学徒勤労働員令・女子挺身隊令を公布実施する。

七月十七日松山商業学徒三〇〇人・宇和島商業学徒一〇〇人が神戸製鋼へ、八幡浜商業学徒一〇〇人が日本製鋼へ通年動員で県外へ出動したのが最初で、この月中に中学校三年生以上の学徒が新居浜市の住友化学・住友機械へ、今治市の東洋紡航空工場・倉敷紡績へ女子学徒隊は出発をし通年動員は開始され終戦まで続行された。

その頃合唱した歌「ああ紅の血は燃ゆる」にどれ程慰められたことであろうか。

「ああ紅の血は燃ゆる」

一、花も蕾の若桜 五尺の生命ひっさげて
国の大事に殉ずるは我等学徒の本分ぞ
ああ 紅の血は燃ゆる

二、後に続けと兄の声 今こそ筆をなげうちて
勝利ゆるがぬ生産に勇み立ちたるつわものぞ
ああ紅の血は燃ゆる

三、君は鋏とり我は槌 戦う道に二つなし

決意ひとたび火となりて守る国土は鉄壁ぞ
ああ紅の血は燃ゆる

寮生活は一室に五、六人が二段のベッドで、最初頃は修学旅行気分であったが、戦争が段々烈しくなり、食糧事情も悪化してきた。丸麦や甘薯の切干御飯に、大根の切干、甘薯の蔓の煮たものが三度の食事で、量はドンブリ鉢半分位しかなかった。

それでも交代で作業は続けられた。私たちは住友化学で農産物の増産のための肥料「硫酸」を作っていました。

アンモニアと硫酸を混合して水蒸気で化学反応をさせ、結晶にするのであるが粒の大きい良いものを作るのは五回に四回くらいであり、一回は失敗があった。

アメリカのグラマン戦闘機が操縦者の顔が見えるくらい低空で機銃掃射したのが二回くらいあった。

二十年三月住友機械の工場で卒業式があった。宇和島中学・松山中学・北予中学の合同で五、四年生が同時に卒業した。

その他の学校の状況は、昭和十九年六月二十日松山経済専門学校が住友化学・黒川ダム工事に、新居浜工業専門学校は昭和十九年六月二十五日に名古屋常滑町の大同製鋼に、松山高等女学校・松山城北高等女学校は今治市



住友化学硫酸工場での学徒隊の面々

の東洋紡績・倉敷紡績で飛行機の主翼や十三ミリ銃弾を製造していた。

特に悲惨であったのは、予告して空襲された今治の昭和二十年八月五・六日の大空襲であった。城北高女・松山高女の学徒が銃撃と火災で二十四名も亡くなったことであった。

また、変わったところでは松山工業学校は、通年学徒動員で東洋レーヨに行った学徒もあったが今治市米屋町の伊予航空工業株式会社で木製飛行機の部品をベニヤ板で作ったとのことであった。プロペラ・車輪・翼・胴体を組立てて塗装をする。上から見て飛行機に見えればよいのである。それは**厩機**^{おくり}であったのだ。

しかし飛行場では、本物ばかりやられて**厩機**は被害がなかったと言う。

昭和十一年までの生徒の服装は黒服（夏は霜降）黒帽であったが十二年以降はカーキ色（国防色）一色となり巻脚絆（ゲートル）・女子は十七年からモンペであった。男子帽子も十六年からは戦闘帽に変わっていた。

⑥ 戦争を省みて

昭和十二年私たちの少年期の頃に、支那事変が勃発し戦争がはじまりました。其の直後に藤田准尉戦死で白木の箱で帰還でした。その当時の事は今も頭の中にきざみこまれています。

藤田准尉の村葬が北伊予小学校の校庭で行われ、葬儀の中で、追悼のはな藤田のメロディが流れて悲しかった事を今でも覚えています。

年追う毎に戦争がはげしくなり米英相手に宣戦布告、真珠湾攻撃に始まり、国民の尊い若い命が失われてゆきました。軍の政策により陸海空と多くの人が召集され、戦争に勝つまではという目標に向かって、又志願兵、特攻隊それが当然のように若い人が国の為に命を捧げた長い間の戦争でした。

農村では残された人々、女性子供らが田植等は、隣組近所、子供らも皆助けあつて共同で仕事をして、食糧事情の悪い中がんびり続けました。その頃の人々の人情の深さやつなかりは今頃になって懐かしい感じがします。

昭和二十年四月頃より昼夜を問わず空襲警報がなりひびき、私が東レ（旧東洋レーヨン）に出勤途中、中川原から大間に通じる道の予讃線の踏切を渡った瞬間に、零戦とアメリカのグラマンとの空中戦が目の前で始まり、零戦が機銃掃射おとされて行く様子の恐かった思い出が残っています。今から考えて見ますと五十五年程前の

出来事なのです。

その後、昭和二十年五月の始めに東レの広島工場に九月までの予定で勤務することになりました。其の頃の中川原の様子を日記にかかれて保存しておられた加藤一彌先生におききしたのですが、七月二十六日の夜に中川原に焼夷弾が二十発程投下され、大政島太郎さん宅全焼、大政章さん方にも落下、又予讃線の鉄橋の枕木及び通路用の板ばりが燃えていたそうです。

その後B 29によって松山市内に爆弾投下がはじまり、道後地区を残し市街地は殆ど全焼しました。

数日後八月九日の昼前にB 51敵機が小型爆弾で中川原の本多儀徳さん宅半焼、本多博さん方に疎開されていたキク子さんという方が機銃掃射で死亡、加藤雅夫さん宅の自宅の横の牛舎が小型爆弾でやられ、牛は即死した。その時の様子は牛の片足が屋根の上まで飛び、内臓は破裂し悲惨な状態でした。其の後牛は病気で死んだのではないので、重信川の川原まで運び食糧事情の悪い時代でしたので捌さばいて皆さんに配給したそうです。牛も本望だったのかも知れません。

最初に申し上げましたように広島に勤務中、九月六日八時十五分原子爆弾の投下によって一瞬にして広島市は火の海になりました。世界で初めての出来事で熱風によって体が焦げ、水を求めて川に入り、そして死んでゆく人々に地獄をみるような、言葉では言いつくせない街と

変わってしまいました。亡くなった方は三十万人ともいわれますが、私も被爆者の一人です。爆心地より二キロ以内の所でしたが奇跡的にも命びろいし、原爆の後遺症とたたかいながら現在に至っております。

八月六日の原爆投下後八日山陽本線も開通し、当日午後八時五十分の広島から尾道までの夜行列車に乗車、途中空襲で糸崎尾道間が不通になり糸崎にて下車、五百名余りの人々が集団で線路の上や海岸線を黙々と歩いてる疲れ切った様子。しかし自分としては戦争に負ける事なんかまったく念頭にはなかった。

尾道今治航路の定期船で上陸した今治はB 29の空襲にあい、くすぶりつづけている市街の様子、またやつとの思いで着いた松山も焼野原で果然となりました。

重い心持で帰宅したら八月十四日入隊の召集令状がまっていた。

入隊の日も空襲警報で危険なので見送りの人とも、中川原加藤商店の前で別れ合田忠夫君と二人で丸亀の連隊に通信兵として入隊。翌日が終戦、数日後除隊。

慌ただしい私たちの終戦のあしあとを振りかえりながら、長い間の戦争の果てに得た平和の尊さの中に、多くの犠牲者のおかげで今日の平和のあることを忘れてはならないと思います。中川原の四十七柱の尊い英霊の方々の御遺族の御健勝と故人の御冥福を心よりお祈り致します。

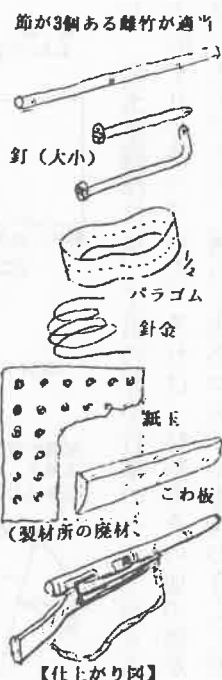
二 子供の生活

1 子供の遊び

① 兵隊遊び（戦争ごっこ）の主要な要素は次の三項）

ア、鉄砲作り イ、刀作り（鞘つき、柳の木） ウ、肝試し

ア、鉄砲作りは戦争ごっこの基本的な持ち物であり、各自がそれぞれに特色のある木製の鉄砲等を作っていた。材料は適当な太さの雌竹（オナゴ竹）、三〜四寸（九〜十二cm）の釘、ゴム紐（パラゴム）、木片では銃床を作る。



イ、刀作りが一番困難だった。適当な太さのネコヤナギを選び、鞘の部分を木槌で叩くと、木質部と皮の部分が分離するので、皮の鞘を作っていた。

ウ、戦争ごっこは両軍に別れた模擬戦であり、また夜間の遊びであったから一種の肝試しでもあった。参加をしない児童は、臆病者だと言われていた。

エ、学童の服装は、軍服姿が流行していた。但し北伊予地区では余り見かけられなかった。（男子は陸軍軍装、女子は海軍軍装のセーラー服）

② 竹トンボ、ブンブン作りは、個人または集団遊びの前提で、自慢作を披露しあった。当時、材料は身近に有り、数多く作ることに伴って竹の性状や刃物の扱いを自然に体得していた。刃物の研ぎ方などは先輩や同僚から教わった。



③ 鉄輪廻し（カネワンまわし）個人や集団での遊び用具だった。遊びは鉄輪につけている数個のリングが出す独特な音が印象的と言えよう。鉄輪は有り合わせのものを利用していった。（自転車のリム等）、永田では鍛屋で作ったものが多かった。

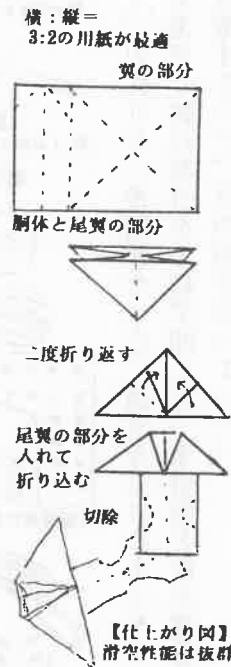
※初心者用の鉄輪

上級者の鉄輪

奇線は電柱に事の際にもらっていた



④ 風揚げ、紙飛行機、模型飛行機、模型グライダーを作ったり、またそれを使つての遊びが盛んだつた。昔は大人も風揚げをしていた。だからそここから「てんぐさーん 風おくれ イワシの頭三ツあげる」の歌声がワラグロから聞こえていた。



⑤ 杉玉鉄砲作りは、子供の年中行事の一つと言える程の広がりを持っていた。それは、材料やその他の物が容易に入手できて、適当な快感やスリルを味わうことが出来たからだらう。小学校の授業中に、手遊び中にパチンと鳴らしたり、友人や女生徒を狙い撃つたりして、教師の指導を受けるのは男子としては普通であつた。だから筆入れに消しゴムを入れ忘れても、杉玉鉄砲は必ず入っていた。消しゴムを忘れても別段不自由はない、ツバをつけた指先で消していたから。

【授業中の手遊び】



⑥ 風車作りは自然の材料を利用しての遊びであつた。だから平素より、自然環境に目を注ぎ、遊びの時節の適否を判断していた。そして時節による子供の集合する場所が自然に定まっていた。場所はカラタチ(きこく)の有る所で、刺を利用していた。



⑦ 木登りは主に神社や林の立ち木を利用していた。また林に巣を作つたり(今の基地ごっこ)して遊んだものであつた。(高学年生が主)だが現今は遊ぶ林が皆無であり寂しい思いである。



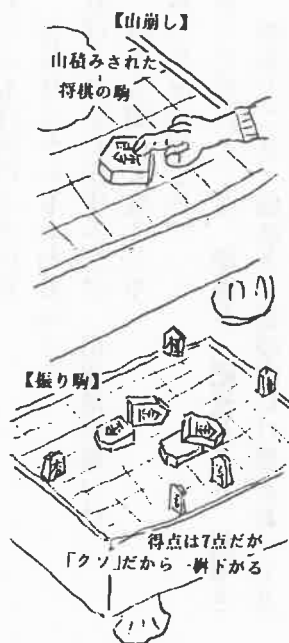
⑧ 将棋遊びには、ハサミ(挟み)将棋、フリゴマ(振り駒)、ヤマクズシ(山崩し)等があり、子供の遊びの主流になっていた。

イ、挟み将棋遊びは将棋に親しむ最も初歩的なもので遊びを通して社会の習慣やルールを自然と身につけてい

た。

口、振り駒遊びは、複数人数で遊べる。(スゴロク遊びと共通) 歩、香、桂、銀、成銀、角、飛、王と位が昇格していき、盤の中央に到達する速さを競う遊びである。地域によってルール等が異なるが、振る駒(金四枚)での数、クソ、シヨンベ、スベラシ、センコダチ、ニギリ等のルールや呼称がある。

ハ、山崩し遊びも複数人数で遊べる、山積みされた駒を音を立てないように、自分の陣地まで持って帰り、駒の得点で勝敗を決める遊びである。



⑨ 女子の遊びについての回想Ⅱ戦前の遊びで記憶されているものを順に上げてみると、縄跳び、一寸飛び、お手玉、子とろう、手毬つき、綾取り、石蹴り、ハンカチ隠し、風船つき、かくれんぼ、真綿とばしぐらいが頭の中に残っている。その中でも、お手玉と手毬つき、風船つきは歌が伴うので記憶が濃厚である。(唄に合わせて調子をとる)

2 子供の唄と衣服や服装

◎川干し(魚掬い)

・生き生き ドンコ 生き生き ドンコ (もどれ)
と唄いながら尾を持って、魚を左右前後に動かすと弱っていた魚は元気になる、そして放してやる。

◎風あげ

・タコタコ揚がれ 天まで揚がれ
・テンゲンさん 風おくれ

風を呉れたら イワシの頭 三つあげる

◎蛭捕り

細竹を柄にして、ホオキグサをとりつけて蛭を捕っていた。捕ったはたるは、ピンかネブカの筒に入れる。

・ホータルこい ギーヤンジ そっちの水はにがいぞ
こっちの水は甘いぞ 甘い方へよってこい

◎縄跳び(長縄跳び)

(□□)さん おはいり はいよろし
あつぷくちきちき あつぱつぱ

シーヤン ホイ(ジャンケン ポン) あいこでしょ
負けたお方は おでなさい(出て頂戴)

◎手鞠つき

・うちの隣の 三毛猫が おしろいつけて 紅つけて
□○橋を渡る時 人に見られて チョイト隠す
・ひい ふう みい ヨウ みよの姉さん
八十で嫁入り 白髪頭にかんざしとして

橋を通れば 子供が笑う 子供笑うな

ヘンドじゃないぞ まずいったいかししました

【妻女山】

妻女山は霧深し 筑摩の川は波荒らし

はるかに聞こえる物音 逆巻く波か兵か

昇る朝日の旗のでの ひらめくひまに

くるくるくる 車がかりの陣備え

めぐるも合図のときの声

合わせるかいもあわせふくう

敵はこのかたかすみだけ 川中島の戦いは

語るも聞くも勇ましや

【あんたがたどこさ】

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ

熊本どこさ 仙波さ 仙波山には狸がおつてさ

それを猟師が鉄砲で 撃つてさ

煮てさ 食つてさ うまさかさつさ

一かけ二かけて 三かけて

四かけて五かけて 六をかけ

橋の欄干腰をかけ・

◎お手玉

おひとつやのおむすけ

お二つやのおむすけ（十まで繰返す）

おひとつおろして おさら

お二つおろして おさら

お手の背おろして おさら

おひとりひとり しやしやりんごどん

中よせしもよせ さらりとお手ついて おさら

おてつぼし おてつぼし おてつぼし

けんちゃん おさら

お馬さん お城 しろーこん おさら

おひじにしかけておろして おさら

お袖にしかけておろして おさら

お手ばたきたたいてたたいてしかけて おさら

小さい橋よーこぐれ よーこぐれ よーこぐれ おさら

おひとつやの お息子

お二つやの お息子・・・・

おつやでかぎりし おさら

やつちきどっこい けんちゃん おさら

◎羽根つき

ひとよに ふたよ みーよに よよに

いつよの むさし なーんの やふし

ここのまいは いったいな（地区によつて）

※「追羽子」は二人が離れて羽子をつき、「揚羽子」

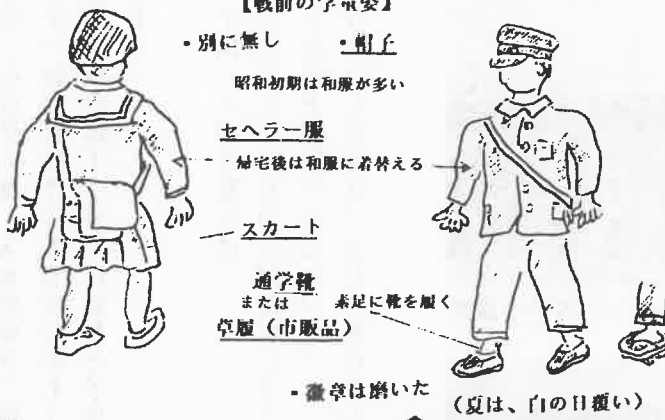
は独りで羽子をつきあげ数え唄に合わせてつ

く。

渡部義和氏・中村恵美香氏・渡部ミチコ氏
長谷川トヨコ氏・中村麗子氏ら五人の談話

児童の衣服や服装 服装は世相に敏感に反応していたが、反面経済的な理由で比較的自由であつたとも言えよう。だが次第に制約のあるものと変容していった。戦況の不利と共に資源や資材の不足によって、自給自足の耐乏生活に追いやられて行つた。学童の服装は、家にあるありあわせの物を着用していた。学校は冬季に足袋を履かなかつた学童を表彰していた。

【戦前の学童姿】



ねーさん髪

高

中

オカッパ

低

(おとさん)

・頭髪(イガグリ)

夏は「霜降り服」

髪ワラ帽子

簡単服

半てん (綿入れ)

ヒキマキ(ラシャ製)

デンチ

(綿入れ)

寒い日は友人の
頭上で手を温める

紅白ハチマキ

千歳の体操は上着を脱ぐ程度

運動会の前後だけ

紅白帽子

キックボールは下駄で蹴っていた

ほとんど足袋

運動着

寸法
六文 六半
七文 七半
八文 八

防空づきん

無帽から

空襲時に備えて
常に携帯
(兼防寒)

黒パンツ

(ブルーマ)

靴下はめったにない

風呂敷

ポッポッ

まれに

(ドク靴? 縫ゴム製)

冬季には藁を
入れて防寒

高等科は
小型のインク瓶

カバン
(キャンバス)
男女兼用

ゴム草履

ジキタビ

(地下足袋)

高等科が多い

鼻緒がよく切れた
(応急処置に道路の小石を利用)

高下駄

日和下駄

チリソウリ
菜草履

学校で講習会
自給自足の生活態勢

学童の服装は、家にあるありあわせの物を着用していた。
学校は冬季に足袋を履かなかつた学童を表彰していた

3 学業について

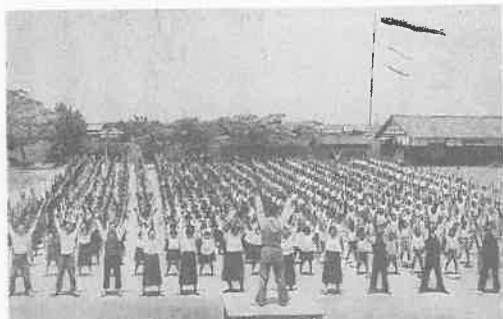
① 学校生活

第二次世界大戦（大東亜戦争）時の学校は、文字通り戦争一色の戦時下の教育が行われていた。当時の北伊予国民学校の様子やそれに係わる子供たちの生活ぶりを回想する。

子供たちの学校生活

・昭和十六年四月の学制改革により、北伊予尋常小学校から北伊予国民学校となった。

・当時の生徒数は、次表の通りである。



北伊予尋常高等小学校の全校体操の風景
(昭和10年ころ)



北伊予国民学校の全校相撲大会の風景
(昭和15年)

年度	初 等 科			高 等 科		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計
昭和16	323	340	663	91	93	183
昭和17	314	350	664	90	81	171
昭和18	319	330	649	80	84	164
昭和19	313	353	666	83	89	172
昭和20	315	350	665	81	90	171

現在の生徒数と、初等科の生徒数を比較すると約二百名前後多い。当時は、戸数も現在の三分の一程度しかなかったが、戦時下で産めよ増やせよの時代であり、五、六人前後の子供のいる家庭が多かったことを物語っている。

・国民学校になってからは、高等科の生徒は、厳しい軍事教練が科せられた。

・「戦地の兵隊さんに食糧を送ろう」をスローガンに、各分団毎に少年団が組織され、地区の荒地や道路の端等の空き地を開墾し、サツマイモや大豆等を栽培し供出した。

・米や麦の収穫期には、約一週間の間、始業時間を一時間遅らせ、全校生徒が一斉に地域の田んぼに出て落ち穂拾いを行い、学校に持ちよってから授業が開始された。脱穀し、俵に入れて供出した。約六俵。

・昭和十八年七月の豪雨で、徳丸の北東部の重信川土手が決壊し、大洪水が発生した。そのため、約四百人余りの中川原等の住民の方が、学校の講堂等ではばらく不自由な避難生活をされていた。

・高等科の生徒が中心となり、水害による被害を受けた徳丸、中川原地区の田畑に流れ込んだ土砂を取り除く勤労奉仕に、勉強は二の次にしてたびたび出かけていた。

・昭和十八年頃から、男子の先生は次々と召集令状がきて出征していき、後任として学期途中に、女性の臨時教

員（代用教員）と替わることが多くなった。

・昭和十八年後半には、食糧増産の目的で、運動場の半分くらいを畑にして、そこへ大豆、サツマイモ等を栽培していた。

・運動場の北端に大きな防空壕も掘られていて、いざという時に備えていた。

・通学かばんには、学用品のほかに防空頭巾を必ず入れて登校していた。

・朝、家を出て学校に着くと、まず、奉安殿に向かって拝礼し、学校の正門をくぐると、玄関横の二宮尊徳の像におじぎし、教室に入ると教壇の上に皇居の二重橋の写真が掲げてあり、授業の始めには、「宮城遙拝最敬礼」を行っていた。

・戦局が厳しくなるにつれ、南方洋上の空母艦から発進したアメリカの戦闘機による空襲を受けるようになった。空襲警報のサイレンが鳴ると、学校にいる時は、直ちに校舎の外に避難し、最上級生指導により帰宅していた。昭和十九年の後半から二十年の前半にかけては、ほとんど毎日のように空襲警報が発令され、勉強どころではなかった。

・学校には、牛、豚、山羊等も飼っていた。主として高学年の生徒が管理当番に当たっていた。

・当時の遠足は、質素節約を旨とする戦時体制下であり、梅干し入りのおにぎりにたくあんがおかずといった粗末

な弁当で、十五km以上は歩くという文字通りの遠足であった。それでもみんな仲良く楽しい行事であった。

・学校の授業の開始・終了の合図は校務員（当時は小使いさんと呼んでいた）のおじいさんの鳴らす鐘の音の合図で行われていた。

・当時の学級編成は、男子組（松）、女子組（竹）、男女組（梅）の組分けであった。

・高等科の生徒は、学校実習田畑で、増産に励む一方、農繁期には、出征兵士の農家へ、徳丸から東古泉までの各部落へ分かれて一日勤労奉仕に出かけていた。

・当時の農業は、機械化されておらず人力に頼っていたため、農家の子供は、低学年の頃から帰宅すると、田の手伝いをするのが当たり前となっていた。

・戦局が厳しくなってきた昭和十九年頃からは、南方からの物資が入らなくなり、子供たちのおやつに、砂糖の入った飴やお菓子類、バナナ等が姿を消してしまった。

・昭和十九年前後より、北伊予村出身の戦死者も多くなり、戦死者の村葬を講堂で行うことが多くなった。そのつど全校生徒が参列して冥福を祈った。

・各地域少年団では、機会あるごとに、子供たちを集めて肝だめしの行事を行った。これは、将来「質実剛健な日本男児たれ」という願いがこめられていて、夜、各地区の神社の森やお寺、墓地等のコースで、上級生が中心となって趣向を凝らし、低学年から全員体験させられ

た。

・当時の水泳は、灌漑用の泉や川がプール替わりとして利用され、上級生の指導監督のもと、地域の子供たちが集まってよく泳いだ。特に、JR北伊予駅の西隣りにあった神崎地区の新泉や氷泉（こうじ）、とつくり泉等は多数の子供たちの泳ぎの場であった。

・昭和十九年九月には、大阪府の桜島小学校の児童が集団疎開してきた。神崎の晴光院等に寄宿していてしばらくの間、一緒に勉強した。

・学校の東約三〇〇mの所に、学校の実習畑（山王原）があり、勤労体験学習の一環として、学校の便所の下肥を桶に汲み取って、二人一組で運ぶ作業をよくした。

・学校の式典の時は、講堂東の奉安殿から、校長先生が天皇陛下の御真影を運び、講堂正面に安置してから式が始められた。

・昭和二十年には、予讃本線の守備部隊（青木部隊）が学校北端の校舎にしばらく駐屯していた。

・昭和二十年五月二十二日、戦時教育令が出され、学校での授業が危険となり、各部落で出張授業が行われた。

② 子どもたちの戦い

○勤労奉仕

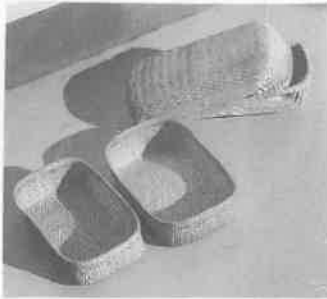
・農繁休業Ⅱ田植、稲刈りの農繁期には生産協力（家の手伝）として三〜四日学校を休業とした。農家の子は自宅を、非農家の子は出征兵士留守家庭で農作業を手伝った。

○国防献金Ⅱ勤儉貯蓄

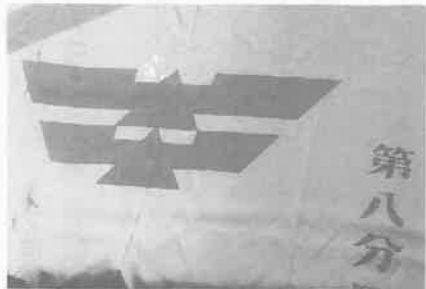
・麦の落穂拾い、各学団ごとに成果を競争した。
・どじょうをすくい、売上金は国防献金とした。
・夏休みを返上し、軍馬の飼料の草刈りをした。
・麦めし弁当、日の丸弁当が強制され、校長は各教室児童の弁当を見て回った。
通学には自作の「ちりぞうり」を使った。校内で「ちりぞうり作り大会」も開かれた。

○大日本青少年団の結成（昭和十六年）

大政翼賛の思想のもとに子ども（少国民）も学校単位としての青少年団が作られ、北伊予小学校では従来



弁当ごうり（弁当箱）



北伊予青少年団の分団旗

の徳丸から東古泉までの九つの学団を第一分団から第九分団までとした。運動会の学団リレーも分団リレーと呼ばれるようになった。

・神社参拝、出征兵士の見送り、勤労奉仕、暁天動員による心身の鍛練、音楽隊による傷病兵慰問で活躍。

○疎開

戦局おし寄せまった昭和十九年八月、大都會の学童集団疎開が始まった。北伊予小学校は大阪市内枚島小学校五、六年生二十五名を受け入れ、宿舍を神崎の晴光院にとつた。きびしい環境の中で疎開児童は「勝つため、国のため」と頑張った。

○松山大空襲で校舎を失った市内の中等学校も郊外の小学校に疎開した。（昭和二十年七月）北伊予小学校へは松山工業高校の一部が入った。

○昭和十九、二十年には極端な物資不足となり、多くは代用品を使った。学童のランドセルは竹製のものが現



れ、制服のボタンは陶器となり、学生帽（戦闘帽）につける校章は竹製であった。ランドセルは古い広告の裏やレッテルの裏を使った。

③ 不自由な生活

大戦中の子供の服装通学

さきの大戦で被った苦難は大きく、言葉で言い尽くすことは出来ない。

この大戦中の児童生徒の日常生活、通学等について体験した人の話より振り返ってみたい。

先ず服装は学生服ともんぺであったが切符制で新品を買うことは困難でつくりものばかりとなった。

運動靴は配給制となったが切符をもらっても、現品が来ない事も珍しくなかった。

ついに稲藁で草履を造ることを習い、学校へ履いて行く様になった。雨の日は下駄であった。五、六年生が自分で造った藁草履は一日で履けなくなった。

また弟や妹の分を造っていた生徒もあった。学校の作業や体操の時は下駄の者は、草履または裸足になった。

学校では薯畑（運動場）の草引き、掃除、高学年の者は出征兵士のお見送り、遺骨のお迎え等次第に勉強の間は少なくなった。

農家では人手が不足し、四年生にもなると手伝いで、遊ぶ時間も少なく、ゴム毬一つ買う事も出来なかった。

買ってやる菓子もなく、薯、馬鈴薯等をふかし、豆を炒るなどしておやつとした。また飴を造り豆菓子にしてよるこばれた。小麦粉に塩と飴を入れてよく練り焙烙（ほうろく）で狐色になるまで焼いて食べていた。

いずれも家により、いろいろ工夫して子供たちに与え

た。

それでも農民は腹が空いて、仕事にならんと言うことはなかった。

主食の増産に対する指導は、厳しくなるばかりで農家は人手不足で子供たちまでも含め懸命に働いた。（この頃、大字で三十五名以上の男子が従軍していた。）

子供は日曜日などに集まって草履造りなどしながら騒いで楽しく遊んだり、夏は蟬捕り泥鰌（どじょう）すくいなどをして、栄養補給の役も果していた。

「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、遊び盛りの子供までも我慢せよ、辛抱せよと強いられた。

子供等に何も買ってやれなかったお母さん方も、さぞ辛い日々であったと思う。一億総苦難の時代であった。

幼い子が意味も判らないまま、「鬼畜、米、英」と叫んでいた声が、今も耳に残っているとも聞かされた。

こんな時にも兵士は命を捧げ国防の第一線で、兵器も充分になく食糧も不自由な中で、祖国のために戦っていたのである。

この大戦で犠牲になられた英霊に心から感謝し、ご冥福をお祈りし、与えられた平和な国を守り次の世代へ申し送らねばならない。

子供に藁草履で通学させたり、全国、津々浦々の墓地へ、再び戦没者の墓碑を建てる事のない様に、努めねばならない。

遺骨なき兵士の墓を洗いけり

三 生活

1 終戦前までの動植物の生態について

昭和二十年頃までの、北伊予の周辺に、生息していた鳥、魚、虫、植物等の実態について振り返ってみると、現在とは自然環境が大きく異なり、今では全く姿を見ることができない魚や虫が数多くいた。

ここでは、昭和十六年頃から昭和二十年頃の動植物の実態についてふれてみる。

① 当時の自然環境

当時の川は、川幅があまり広くなくて、用水路として施用するため、場所によっては、豪雨時の対策として、岸は高く巾も広く作られていた。

そのため、河岸には、ヨシやスズガマ、竹、くぬぎ柳等が場所によっては岸が見えないほど繁茂し、家庭の燃料の供給源として、また、鳥や虫のよい生活環境を提供していた。

また、当時の土地台帳を見ると、各地に原野（原）や藪、草生地、さらには、鎮守の森等の面積が約一%余りを占めており、鳥や虫たちの格好の生活環境を提供していた。

② 鳥類について

・カラスとトビ

大空に輪を描いて舞うトビの姿をよく見かけた。通学途上、十羽位のカラスと一羽のトビが輪を描きながら舞う光景をよく見かけた。トビが滑空姿勢で交戦する姿にしばし見とれることがあった。

・梟（ふるつく）

神社の森や藪に生息し、夜になるとホーホーと鳴き、夏の夕方、人家の高い棟瓦に止まっている姿もよく見かけた。

・コウモリ

夏の夕方、巢から飛来した十〜十五羽のコウモリが群舞する姿をよく見かけた。

・スズメ

神社の森や竹藪に集団で住みつき、収穫期の稲穂等を食害し、田によつては三十%も減収することもあった。かかしや竹鳴子で追い払っていた。

・ツバメ

首元に茶色の輪の入ったトックリツバメも少し見かけた。

ツバメも当時は各家に巢を作り、二〜三回産卵し子育てに励んでいた。

また、当時の家庭では、門や家の戸にツバメの出入口を設ける等、益鳥として大切に保護していた。

・ムクドリ

晩秋には、ムクドリの大群がゴーという轟音をたて

て飛び交う姿を良く見かけた。

・モズ・ヒバリ

これらの小鳥も現在より多くいた。また、カワセミなども時々見かけた。

③ 川に生息する虫や魚貝類等について

・タガメ・ゲンゴロウ・ミズスマシ

これらはどの川にも多く見られた。しかし、現在全く見られないのは残念である。

・川ガニ（もくずガニ）

どこの川にも多く生息し、三月中旬から四月上旬に産卵のため海の近くへ下るので、雨が降り、水が少し濁った頃を見計らって川に網を仕掛けると大量のカニが獲れた。

・ベンケイガニ（せんちがに）

六月頃、各家の湿気のある北側の石垣沿いや壁に、親づめの赤い小型のベンケイガニがたくさん這い回っていた。

・川エビ

主として、泉のきれいな水が流れている小川を中心に、体長3cm位の小エビがいた。これは、食用というより、海釣り用の餌として利用された。二、三十分もあれば一合（百八十cc）位の小エビが獲れた。そのほか、体長10cm以上もある手長えびも獲れた。

・どんこ

動きの鈍い魚で、川岸の石垣の隙間等に顔を出し、小学生でも竹竿で釣れた。また手で掴みとったりもできた。

・ふな・はや・しょうはち

ふなはどこの川でもすくい獲りができたし、水のきれいな流れの早い小川では、スマートな形のはやとかしょうはちが群れをなして泳いでいた。

・どじょう

どこの小川でも、たくさんどじょうがおり、子供たちは夏休み等じよれんですくって帰り、各家庭でどじょう汁にして食べていた。特に、秋、稲の収穫前には、小川の水が少なくなり、川の水たまりの所の泥を掘かえすと多くのどじょうが獲れた。

・なまず・うなぎ

どの川にも、ふんだんに生息していた。七、八月頃に、竹棒の先に空き缶を縛り付け、その中に、ほろぎれを詰め込み、灯油を浸み込ませたあかりを準備し、夜、川面を照らし、餌取りに出てくる大きななまずやうなぎ等をヤスでついて捕獲していた。（この漁法を夜川と呼んでいた）

また、二月頃の農閑期には、川の水も少なくなった頃、近所の大人が数人集まって、少し広い川の一部を堰止め、水をかい出して、ふなやなまずをはじめ、多

くの魚を一網打尽にして冬季の蛋白源として、各家庭で食用に供していた。

・タニシ

稲刈りの終わった湿田の表面の土の中に大きく太ったタニシがたくさん生息し、子供や女性がそれを拾って持ち帰り、身を抜き取って佃煮にし、珍味として食べていた。

・シジミ

主として年中、水が流れる川底の土砂の中には、ふんだんにシジミが生息していた。黄胆の妙薬としても有名であった。家庭でもよく食べていた。

・カラスガイ

小川が集まってできた沼地などには、シジミの十倍以上のやや長まるいカラスガイがおり、沼地の泥の中をさぐってとり、よく食べた。

④ 虫類等について

・蚊（あかいえ蚊）

夏分は、腹に縞模様をついたやや大型の蚊の大群が顔に当るぐらいいた。家の中に入ると、ウワンという蚊の羽音が聞こえていた。従って、各家では、夜は蚊帳をつつてでなければ寝られない状態であった。また、農家の牛の駄屋では夕暮れ時、牛の蚊除けに楠のおがくずをいぶして、蚊よけをしていた。

・ハエ

家畜飼育の農家が多く、ハエにも悩まされた。ハエ叩きやハリ取り紙、ガラス製のハエ取り器などは各家庭の必需品であった。

・イナゴ

九月中旬過ぎから、イナゴが田の畦道に植えた大豆や稲の葉に群がって葉を食い荒らしていた。

養鶏農家では、イナゴが鶏の最高の餌となるため子供たちは、学校から帰ると布袋に竹の筒を付けた袋を持ってイナゴ取りを熱心にした。

・ウンカ

稲の大敵であるウンカは、当時、それを駆除するために、水田に十分水を溜めておき、早朝、朝露があるうちに一家総出で、田に出掛け、父親等が機械油を水田の表面に散布していくと、みんなが足で稲の葉っぱに水をけつりあげて、水面に落ちたウンカを油膜によって窒息死させる方法をとっていた。

・メイ虫

稲の茎を食害する害虫として恐れられていたメイ虫を駆除するため、駆除対策として、メイ虫が産卵した稲の葉一〇〇枚を持っていくと一枚の抽選券がもらえ、いろいろな商品がもらえた。学校でも子供にメイ虫とりを奨励していた。

・ホタル

北伊予の各地では、六月頃になると、夜、小川の岸辺には、源氏ボタルや平家ボタルの大きさまざまのホタル火の乱舞を見ることができた。

・かぶと虫・クワガタ・かみきり虫等

季節になると、これらの昆虫たちが各家庭の電燈に引き寄せられて飛んでくることがあった。

・トンボ

夏の終わりに初秋にかけて、赤トンボの大群が空を乱舞する光景がしばしば見られた。そのほか、大型の鬼ヤンマや各種のトンボもどこでも見ることができた。

⑤ その他の小動物について

・ヘビ

各農家等には、家の主とも言われる体長一・五m前後の青大将が天井裏等に住みついていた。

また、毒蛇のママシも横田の大谷川沿いの土手や神社や藪でもよく見られた。また、被害に遭う人もしばあった。

さらに、水田や畑では、青大将やからす蛇をよく見かけた。毒は持っていないが、時には攻撃的な姿勢を見せることもあった。

・イタチ（オサコとも言ふ）

養鶏場の金網を破って侵入し、一晚に一、二羽の鶏

を殺すことがよくあり、捕らえてそれを役場に持って行くくと報奨金がもらえた。

・オゴロ（もぐら）

畑に穴を掘って作物をよく荒らし、それを捕獲して役場へ持って行くと報奨金がもらえた。当時、オゴロとりの名人の中学生がいた。修学旅行の費用を稼いだそうである。



2 物資の統制

① ほしがりません勝までは

戦争が長期化するに従って、生活必需品も不足するか、政府は国民精神総動員運動によって国民の戦意高揚と挙国一致による「尽忠報国」を強要し、経済面における統制も強化していった。

○食糧政策

昭和一四年「米穀増産奨励規程」

一五年「米穀増産要領」「米穀集荷配給統制」

生産には「供出」、消費者には「配給」強制

一六年 生産者単位の戸別割当、米通帳制の配給

一七年「食糧管理法」食糧営団発足

一八年 米の配給量一日二合四勺と決められた。

二〇年 一日二合二勺（豆類、雑穀、イモ類代替）

○その他の物資の統制（配給）

昭和一四年 主要商品に公定価格

一五年 米、味噌、醤油、砂糖、マッチ等

一六年 清酒、木炭、食料油、雑穀、菓子、麦等

一七年 衣料品、水産物、油脂、食肉等

生活物資の配給は「隣組」を通して行われ、ノート、運動靴等は、学校を通して児童に輪番に割り当てられた。

重油、ガソリン等は早くから軍部が独占し、民間に出回ることとはごく少なかった。『ガソリンの一滴は血の一

滴』とまでいわれ、非常にきびしく管理された。

『ほしがりません勝までは』で耐えしのんだ。

② 戦中・戦後の食生活について

終戦をはさんで戦中・戦後の約一〇年間の食生活は厳しいもので飽食の現在では想像もつかないものであった。

昭和一二年「見よ東海の空明けて」「海征かば」等の軍国調の歌と共に戦争は年を追って激しく拡大していった。食糧・生活必需品は逆に日を追って欠乏していった。昭和一四年米穀配給制公布、ついで白米禁止（七分搗き）となり米・麦の不足はいっそうきびしく、闇米に頼る時代に入っていた。昭和一五年、米・みそ・塩・醤油・マッチ・砂糖等が切符制になり、ついで米穀管理規制による市町村に米の供出割当がなされている。北伊予地区は殆んどが農家で自家保有米で食糧に事欠くことはなく、味噌・醤油も自家製の家もあった。（今でもその習慣で味噌は作っている家庭もある。）非農家はこの頃より日を追って食糧不足に陥っていった。老人・女・子どもで増産に励み皇紀二六〇〇年の式典により国威の高揚と「トントンとんからり」の隣組の歌にはじまる協力態勢を作り上げていった。当時は人力による耕作で肥料、農薬などない時代で、米は反当六〜七俵、麦は四〜五俵も収穫されればよい方ではなかったか。昭和一六年には麦類も配給制になり、外食券が発行された。米は一人一

日二合三勺で麦は丸麦の配給であり一度炊いてから米に混ぜて炊かなければならなかった。昭和一七年には食糧管理規制が公布され、農家に米の売り渡し義務が課せられ政府の強制買い上げになり自由売買は禁止となった。この制度は現在も続いている。魚も四日めに一人三〇匁の配給となった。昭和一八年になると芋パンが出廻り病院以外業務用は玄米となった。戦争は必ず勝つと信じて増産に励み芋類大增産運動の展開、学校は農繁休業、落穂拾い等が行われた。スイカ・メロン等は栽培禁止、大豆・甘藷が運動場にまで植えられるようになった。供出も厳しくなり小作米も代金納入制となった。当時の米価は昭和一二年一二円九〇銭、一八年一八円四二銭である。昭和一九年には大豆、食用米、トウモロコシ、芋づる等が代用食の五割を占めるようになったが必勝を信じて粗食に甘んじ統制も乱れなかった。しかし、終戦によりいつきに食糧不足が表面化し、統制も崩れて闇売買の時代に入ってしまった。農家は米麦の他に大豆、粟、キビ、甘藷、南瓜等の畑作物もあったがそれでも麦一升到米二合半を入れたご飯ならよい方であった。非農家の食糧不足は深刻で麦一升がなかなか手に入らない時代となり、物々交換によるしかなかった。農家への買い出し、物々交換の人が多く取締りも厳重であったが完全ではなく、できない社会情勢であった。終戦による軍人の復員、徴用工、学徒動員の帰省は喜ばしい事であったが人口はふ

くれ上がり食糧はますますひっ迫していった。米も平年作の約半分の三〇〇〇石（松前町）程度といわれていた。耕地面積は現在と殆ど変わっていない。松前町で六五六町歩余であった。

戦後はインフレと食糧難に苦しめられ人々の多くは食うや食わずの生活となり、学童も昼食弁当を机の中にかくして食べ、校庭の隅では弁当を持たない子どもの姿も見られた。甘藷の弁当、雑炊の弁当を持って来る者もあったり、飢えの為盗みが増えたり、栄養失調児も出たりするようになった。米はおろか麦があればよい方で甘藷、南瓜の蔓あげ後の赤黄色のものまで買い出しに出て食べられるものは何でも食べた。当時「モク拾い」といって煙草のすい殻を拾い、それを煙草に巻き直して売り、闇の食物にありつく姿も見られるようになった。また靴磨き少年が町に見られるようになったのもこの頃である。

米価も昭和二〇年には六〇円、次年度より二二〇円、七二〇円、一四七八円とはね上がっていった。闇物資と進駐軍からの物資で品物、食糧品は町に出廻り、金と米さえあれば何でも手に入るようになった。

③ 戦争末期の食糧事情について

戦争末期における食糧事情は、益々逼迫の度を加え、主食の配給さえも、一部おくれがちなところがでるなど、その食糧の確保は、連合軍の本土上陸も間近にせまり、双方相まって、最悪の事態になっていた。

愛媛県は、昭和二十年三月三十日付をもつて、これらに対処するため、次のような通達を県下市町村町宛に出し、山野草採取運動を展開して、食糧確保の万全を期するよう協力依頼を行っている。

記

山野草採取運動実施ノ件

標記運動実施ニ関シ、関係団体トノ協議ノ結果、応急ニ左記「実施要綱」ヲ決定シ、地方的実情に依り、適切な運動ヲ展開スルコトト相成候。就テハ之ガ趣旨ノ普及徹底ニヨル目的達成ノ為、積極的ナル御協力相願此段及御依頼候。

山野草採取運動実施要綱

一、趣旨。

決戦食糧確保ハ、現下ノ急務ナリ、従ツテ主食ハ勿論、副食物ニ於テモ、アラユル山野草ノ食用化、並ニ薬用化スルノ要亦緊切ナル折柄、食用可能ナ山野草ヲ徹底的ニ採取セシメ、之ヲ食糧及ビ薬用ニ供スルト共ニ、食糧確保ノ重大性ニ対スル認識ヲ深メ、更ニ加工ヲナシ、県内都市ニ向ケ出荷ヲ促進シ、以テ決戦食並

ニ、医薬品問題解決ノ一方途ヲ講ズル運動ヲ汎ク展開セントス。

二、山野草

一、主食物代用となるもの

落、つばき、わらび、ぜんまい、つくし、よもぎ、よめな、れんげ草、はこべ、おおばこ、たんぽぽ、あかぎ、クローバー、すいば、すぎな、せり、いたどり、やまごぼう、みつば、山うど

二、野菜代用となるもの

のびる、たらの芽、ぎしぎし、つるな、すみれ、かわちしゃ、ほど、あさつき、くさび、オランダカラシ、えぞあざみ、すべりひゆ、いぬひゆ、いのこづち

三、茶の代用となるもの

すいかずら、あさぐさ、ふじ、あけび

四、澱粉食となるもの

かたくり、くず、おにゆり、じゅずだま、やまのいも、竹の果実、たいづ

以上の山野草が主たる代用食となるもので、この外、薬草としての種類も多く、ここでは省略するが、灰汁抜き法、加工、食べ方は、地元によって異なる。

3 農家の生活（大正と昭和初期の）

大正五年に村役場から出された調査書によると中川原では農家は一〇二戸あり、その中で自作は一八戸、自作兼小作は三四戸、小作は五〇戸となっている。一方小作料は三段階にわかれ、上は反当り四俵と一斗、中は三俵と一斗五升、下は二俵とあります。当時の反収は平均六俵半で、豊作でも一俵増位でしたから、一町歩の小作をした農家でも年貢を納めたら残りの米は二〇俵程となります。これで一年間の生活費と食糧をまかなわねばなりません。その頃日常の費用は現金を支払わないでも多くの商店では通帳を備えて置いて掛売をしておりしたので、盆と節季の二度に支払うのが常習でした。それにしてもその支払は米を売って払うしか方法がないわけで、支払いが出来ないで次期まで待つてもらう家が多かったようです。

初すりの時に出来た小米は粉に挽いて団子にして、団子汁にしたり、味噌汁に入れたりして食べていました。このようにして合格米を一俵でも多く売るように倹約したのです。普段の日は麦八分、米二分位の言わば麦飯でしたが、とき折り、いりこ、油あげ、里芋、大根、人参などを入れて煮込ご飯を炊いてくれると美味しかったです。しきわ日には、餅、寿司、カレー、手打ちうどんなど作ってくれるので、そんな日が来るのを楽しみに待っていました。

中川原はわりあい湿田が多く乾き田には麦を、湿田

へは青採り蚕豆などを作付けましたが、収入は少なく生活は貧しいものでした。

① 伊予絣の機織り

今出や塩屋には伊予絣の機屋が多くありました。そこから外交員が材料を自転車を持って来て、織り上がった反物を持ち帰ってくれるのです。農家の婦人達の内職として、とても喜ばれました。一日に一反織り上げる人は遣り手で、大方の人は二日で一反か三日で二反織るくらいでした。織り子さんは絣の着物に櫛がけで、両足を交互に踏んで樋の通るように縦糸を上下交差して分けま

す。分けた間へ樋を左右にころがして横糸を通し、ボタン、ボタンと箆おさを打って織りつめてゆきます。樋の左右に転がる音、足で踏み分ける音、箆を打つ音が交錯して賑やかです。織賃は大正八年頃は上物一反で一円五十銭、安くても八十銭くれました。その頃の米価は一升三十銭くらいでしたから、普通二日で一反織り上げますと一日米二升くらいにはなりました。皆一生懸命になって、朝から晩まで休まず働いたものです。夜になると、ランプを機織の鳥居に吊るして、織ったものでした。大正十年に村へ電灯がとまり、夜業が楽になりました。その頃の労賃は現在と比較にならぬくらい安いものでしたが、当時としては農村婦人の唯一の収入源であったのです。

嫁入り前の娘さんは、はた織りの技術をおぼえなければ、農家の嫁にはなれないと一般に考えられていたので、

娘のいる家では機織を据えて、織る稽古をさせてから嫁がせたものでした。

ラジオもテレビもない頃のことでしたから、青年たちは外の仕事の暇なときや、雨で出来ない日は仲間の家の納屋等が集まってむしろ俵を作るための縄ないをしたり、俵あみをしました。冬の日は今のようにストーブ等は勿論ありませんので、火鉢の炭火で手を時どきあぶりながら半ば競争して作業をしたものです。また夕食後は先輩に連れられて、娘さんが機織りをしている家へ寄り話相手になり、仕事の話、世間の話、誰彼の噂話に花を咲かせ、時には恋が芽生え青春の楽しい思い出となった人々もいました。

その頃一年間に中川原へ機織賃が九百円近く入ったようですから、お米百五十俵にあたります。この頃の副収入の唯一のものでしたので、主に娘たちの嫁入り支度の費用として役立ったと思います。

② 農村労働者

その頃は工場、商店などへ勤める娘は殆んどなくもしまい職場でした。他へ勤めるまでもなく農家自体人手不足で労働力を必要としました。それで奉公に出た者の多くは農業労働者で、労賃は男子が一ケ年で四十五円、女子は二十八円くらいでした。年間働く人には、盆節季には反物を送ってくれる家もありました。私の家の東門の

北隅に昔おとしと言われていた男の奉公労働者が寝泊まりしていた四畳半ほどの畳の間に物置として残っていました。子守は食べさせてもらって、小遣金をいただく程でした。貧しい家の娘は小学校へ行く年齢になると、子守にやとわれて行く子もあり、尋常小学校を卒業すると高等科へ進む女子は少なく、もう家事労働に専念させられたものでした。

③ 農村の燃料

湯を沸かしても、ご飯を炊くにも、風呂を沸かすのに、私の幼い頃はみんな薪でした。その薪が中川原は山がないので、大変不自由しました。風呂は麦藁や豆殻を出來秋に物置に積込んでおいて焚きました。小麦藁は裸麦の藁より効率がよく風呂も早く沸くので重宝がられましたが、それより私たち農家の大部分は藁葺の家でしたので、十年毎に屋根の葺き替えをしなければなりません。そのとき小麦藁が一度に沢山必要です。それで何年もかかって蓄えておくのです。

炊事用の薪や柴は、現在の伊予市や砥部町の雑木山を十人位で一組となり、立木を入札して、それを切り倒して薪にし一年間の燃料としていました。山へ行けない家では、それを分けてもらったり、商人から買っていました。山の持主と交渉して、入札がすむと組員は朝早くから、弁当持参で出かけます。近くでは宮の下か八倉、遠くは砥部の方まで行きました。山では雑木や松を切り倒

す者、それを枝打ちして束にする者、それぞれ手分けして作業します。慣れない仕事でなかなかうまく出来ないが、束にした後、柴物はオークという棒の両端に一束づつ突きさして、道掛かりのよい所まで担ぎ出し積上げておきます。丸太はにないに入れて担ぎ出します。大正頃は荷車で、昭和に入ってから、リヤカーに積んで帰るようになりました。その日に出来た束物は大方その日に積み帰るのですが、丸太は後日になることが多かったようです。遠方の時は早く作業を切り上げて帰途につきませんが、何れにしても一日働いて荷を積んで帰るのですから大変でした。家の者は帰る時間を見計らって、八倉の矢取川まで迎えに行くのです。矢取川へ上る坂は急で、一人では登れません。迎える者はそれぞれの車の後押しをします。土手へ上がれば後は徳丸まで下り坂で楽です。矢取の坂を汗を流して押し上がった頃には冬の日とはとっぷり暮れて来ます。下り坂になると汗をかき濡れた肌に寒さがしみがたがたと震え出します。家にたどり着いた頃はすっかり暗くなっています。こうした作業を三週間くらい繰返し柴や松の枝類は薪小屋か納屋へ積み込み、丸太は適当な長さに挽いてから何日かかけて鉞で割木にします。割盛るにするのは私たち子供の仕事で学校から帰ってから、よくやりました。割り終えると薪小屋が軒下に積上げました。

重信川の堤防には多くの松が昔から堤防を補強するた

めにあり、大水が出ても土手が切れてくずれることのないようにと植えられたようです。明治になって廃藩のとき、重信川の堤防はそれぞれ沿岸の部落が管理するようになりました。樹齢二百年位と思われる古松の並木ですから冬の風の強いときには枯松葉が落ちてきます。それで、風の強く吹いた朝は子供達が松葉掻きに出かけました。朝早くより頬かむりをして、竹の熊手と草刈籠を持って行きます。風に落とされた枯松葉が土手の草の上にあるのを掻き集めるのです。落ち葉と枯草とで籠一ぱいになると、熊手の柄で籠を担って帰ります。枯松葉は燃えつき易いので、よく乾かして焚き付けの材料にしたものです。

④ 隣つき合いと日常生活

わが家の西隣との境界に尺二寸程の溝があります。南の家の生活用水と、前後四軒の雨水を流していた溝であろうか。そこに狭い石橋が今でもかかっている。そこだけ土塀がなく、昔は西隣とゆききしておりました。一方わが家の東門を出た所にも一間余の道をへだてて東隣の生垣が昔ありましたが、そこも人が通れる位あけておりました。昔は近所隣がよくゆききして話し込んだり、珍しい物を料理したり、貰ったりするとおすそ分けしたりしていたのを覚えています。一軒おいて隣りへ行く折しも縁を素通りしたりもしておりました。

昔の家は縁側の障子をあけると兩戸の敷居の外に濡縁

がありました。天気の良い日はお年寄りによく濡れ縁で針仕事をしたり、孫の守りをしたり庭へ降りて遊んだりしておりました。また先の石橋を通って隣のお年寄が来て濡縁へ腰掛け話し込んだり、時候の好い頃は障子を開放しての昼寝もよし、庭つきの濡縁は老人だけではなく子供にとっても、主婦も主人にも重宝で便利で気持ちよく使われていた場所ではなかったでしょう。

東門と我が住居とのあいだに、五衛門風呂がありました。薪の関係で火災の危険をさけてか或いは煙を嫌うか、昔はこの家でも住居とは離しておりました。当時は家のすぐ裏に野川があり、村中なので生活用水も混じっていただろうが、何時も綺麗な水がさらさら流れていました。風呂場に打抜きポンプを設置してない頃は学校から帰ると、裏の川から風呂へ水をバケツで汲み込むのが私の役割でした。そして夕方になるとバチパチと麦藁で風呂を沸かしていました。住居には勿論電灯はありませんが、風呂場へは未だ配線はなく、ランプやローソクを使っていました。その頃は近所四軒程とは主婦や子供等は、お互いにもらい湯にゆききしておりました。現在とは違い隣同志は開放的で仲よく助け合っていたのです。

農作業でも現在のように機械や動力はなく、人力が大部分でしたので、手間替えと言って、同一作業は言うには及ばず、仕事が違っていても成るべく金銭の遣り取りはせず、手間の貸し借りにして、お互いの助け合いで労

力不足を補っておりました。

⑤ 冠婚葬祭

昔は結婚式も迎える家で行っておりました。披露宴もそうでした。日取りがきまれば、前もって組長が組内の方を寄せて、当家的方と共に献立の程度や人数をきめ、その他もろもろの役割をきめます。組内に一人や二人は魚を捌き料理の采配の出来る器用な方がいて、式の前日から買物をして早速取り掛かります。膳・椀・皿や料理を仮置するハンボウ、臨時の竈、七輪などの調達と借り合せ、料理の下ごしらえ準備万端整えておいて、当日の予定時間までには料理を間に合わせなければなりません。それで当日凡て終われば今度は後始末と、本当に大変だったと思います。現在は式場へ頼み全て済ませます。費用は掛かりますが便利になったものです。

一方葬儀の場合は今でも組内の者は役割を定めて、お手伝いしております。昔は訃報するにも電話が無く近在の親戚等へは必ず二人連れ立って自転車でも知らせに廻りました。賄いの方は当日朝早くから買物に走ったり、終戦頃までは精進料理を守っていたので、野菜等は組内の者が作った物を持ち寄ったりもして材料をそろえて、近親者と手伝い人の昼食と、葬儀後の賄いの準備と、葬儀全般のお手伝いをしました。告別式はお寺まで野辺送りをして、お寺でとり行っておりました。

四 農 業

① 単位 1 営農上の習慣

農村の生活、営農の計量の単位として尺貫法が使われた。参考までに、一覧表を表示します。

	尺 貫 法	メートル法
長さ(距離)	1寸 1尺=10寸 1間=6尺=60寸 1町=60間=360尺 1里=36町=2160間	3.03センチメートル 30.30センチメートル 181.83センチメートル 109.09メートル 3.93キロメートル=約4km
広さ(面積)	1歩=1坪=36平方尺 1畝=30歩 1反(段)=10畝=300歩 (300坪) 1町=10反=100畝	3.306平方メートル 99.17平方メートル=約0.99 ⁷ / ₁₆ 991.74平方メートル=9.92 ⁷ / ₁₆ 9917.36平方メートル=99.17 ⁷ / ₁₆
重さ(重量)	1厘 1両=100厘 1斤=160両 1貫=3.25斤=1000両	0.0375グラム 3.75グラム 600グラム 3.75キログラム
大きさ(体積)	1合=10勺 1升=10合=100勺 1斗=10升=100合 1石=10斗=100升	180.39立方センチメートル 180.9立方センチメートル=約1.8リットル 18.04リットル 180.39リットル

かなり曲折していた。道標は、その地域の小さな文化遺産である。その場所にあつてこそ価値がある。移動させたり、私物化してはならないと思う。

その他に、伊予市上野へ通じる「八丁坂」という坂道

長さ(距離)

の事例として、旧松山道と八倉麻生道の分岐点(元日野理容店前)に「松山へ一里二十二町」の道標があつたが今はない。松山市の起点札の辻までの里程である。旧道は

(六〇間×八〇一〇九×八〇八七二米)がある。

広さ(面積)の事例として鶴吉の元東池八反七畝五歩、元西池一町六反三畝二十八歩、私有地一反一歩、合計二町六反一畝四歩(二五八九七、三三平方米)は昭和三九年、鶴吉より無償提供され、昭和五〇年塩見園開設まで、共立衛生センターとして使用、その後、屋内運動場も増設され、健康増進センターとして各種運動競技コミュニティの広場として使われている。

広さ(面積)と容量の事例として、農地改革以前の小作料は物納より金納に変わったが、容量であつた、昭和一九年の小作料控をみると、鶴吉のある小作地で四反一畝一九歩(田四枚分)六石七升、反当たり一四斗五升、二七四、三六円、石当四五円、神崎のある小作地で二反一畝二七歩で三石五斗、反当一六斗、一五八円となっている。

公租公課水利費(字費)は地主持ちであつたが、当時の反収六俵(二四斗)〜七俵(二八俵)としては過酷であつたと思われる。

水田灌漑用水については、上流より自然流水、湧水泉を水源とする水路系、電力揚水(ポンプ)による水路系、溜池(草田池)によるもの、田に補充用に小井戸の水源が所々に点在していた。

家庭で使用する水については、水道のない時代、専ら井戸水であつた。手押ポンプ、釣瓶で、下水路のない家

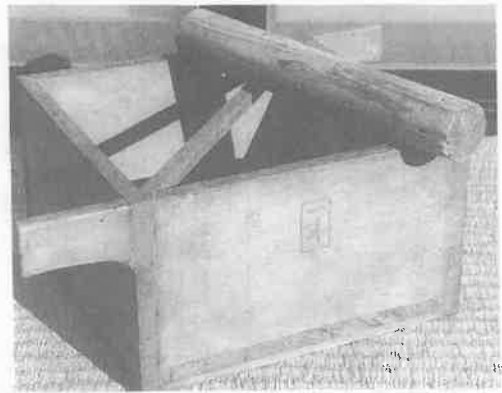
庭は「すわし」に流し込んで済む時代であった。水の使用量は僅少であった。各地域に簡易水道ができたのが昭和三〇年頃、丁度北伊予小学校が町村合併後の改築で水洗トイレ設置に伴って神崎出作鶴吉地区に開設された。

その他水泉河川に関連したこととして、昭和十八年七月連日の大雨で重信側堤防が決壊し、その濁流は中川原全地域をおそった。さんたんたる状態であった。ちょうど戦時中で人手もなく復旧には部落中一致協力して復旧に当たった。

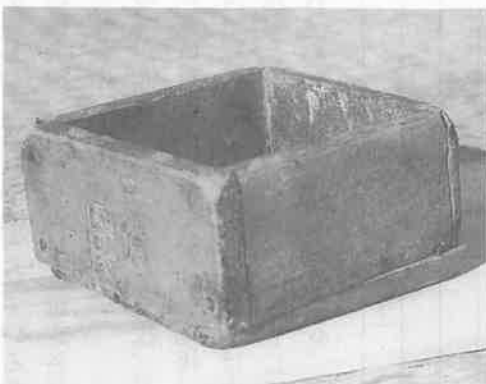
昭和二十年になって漸く稲が植えられるようになった。この事は忘れてならない事である。

改修前の重信川は流量も多く、河床が高いこともあって、伏水流域は湿田が多かった。昭和十三年頃、東洋絹織（東レの前社名）の操業開始による大量の地下水の汲揚げにより、湿田が、ある程度改良された。戦後昭和二十年代の重信川の大規模改修による河床低下と、地下水の大量取水による地下水位の低下で沿岸農地は乾田化されていった。

境界については、伊予市上野と高瀬鶴吉三軒屋の藩境石は別として、堰框の石柱か、家屋周辺では石垣石積が、石橋の橋台が境界の目安になっている。特別に石橋石塊を埋め込んだもの、水中では腐らない松杭を打込んだものがあった。



1斗ます



2合5勺ます1液用

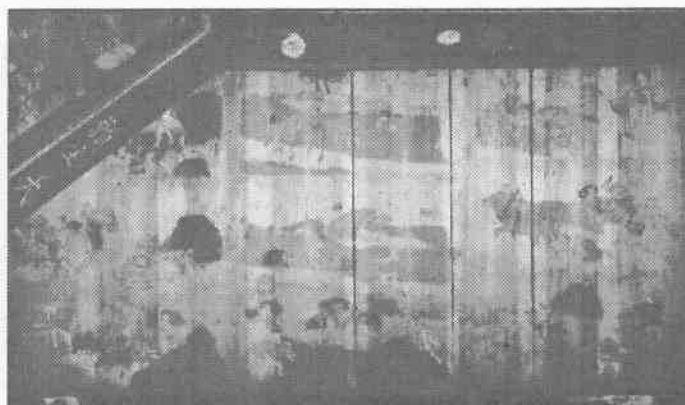
部分拡大



田植えと苗打ち
苗とりと苗運び
代掻き (牛、マグワ、
鼻やりの童子)



種まきと不明の部分
種まきに付随して描かれて
いるから、親子が里へ「焼
米」を持って行くのだろう？



蔵入れ
脱穀と選別や俵詰め
(土臼) (唐箕) (角斗升)
稲こぎ
(運び) (千歯)

除草
熊手と元掻き
揚水
水車と桶
稲刈りと運搬
(人、牛)

上から
苗打ちとたうえ
苗取りと苗運び
代掻き
耨まきとと
(不明)

② 「奉納額」 農耕図 (安政五年に奉納)

高忍日売神社 (たかおしひめ) に奉納されている絵馬
の中でこのような絵図は全国で約一九枚程度確認されて
おり、四国ではこの神社の一枚だけである。
奉納年代では藩政時代が九枚、明治以降が五枚、不明
が五枚あって、保存状態は良好が六枚、普通が九枚、不
良が四枚となっている。この高忍日売神社の絵馬は内容
並びに保存状態は最良のものの一つと言える。そして描
かれた農業技術には次のようなものが認められる。

・耕起 (犁、牛)	・代掻き (馬鋤、牛)
・種粉浸し ×	・播種 ○
・苗取り ○	・苗運び ○
・田植え ○	・除草 (熊手打ち、草取り) ○
・揚水 (踏車、桶) ○	・刈取り ○
・稲束運び (人、牛)	・乾燥 ×
・脱穀 (千歯、女)	・選別 (唐箕) ○
・初すり (土臼)	・俵詰め (角斗樹)
・蔵入れ ○	
・その他 (風呂敷包みをもつ母と小児は、焼米を土産に里帰 りか?)	

(○×は絵の良い不良を示す。)

岩手・白山神社 (安政五年) 石川・石部神社 (弘化三年)
福島・熊野神社 (安政五年) 埼玉・安楽寺 (寛政二年)
京都・大原神社 (慶応四年) 奈良・天高市神社 (文久三年)
和歌山・小倉神社 (文久元年) 愛媛・高忍日売神社 (安政五年)
(以上関西圏で明治以前に奉納された絵図所有の八社寺)

2 農耕作業

① 戦前の農耕作業

当、北伊予地区は殆ど二毛田で二毛作をしていた。従って農耕作業は米麦作りが中心であった。野菜作りは自家用野菜が主であった。

◎米(稲)作り農耕作業

一、田鋤

六月麦の取入後、麦の畝こわしの田鋤きをする。鋤き終わった畝間に、堆肥、乾し草、肥料をふり、鍬で平にする。これを「切り込み」といつていた。



二、苗代

五月に入り田の一部に短冊型の苗床作りをする。苗床は表面土をねり柔らかくする。(その頃、麦は成長中である。)

三、初蒔

苗床へ初種を手でふって蒔く、その後「すくも」をふってその上へ砂をまき種を落ちつかせる。

蒔いて五十日位で苗丈が四、五寸に伸びてくる。この苗の成長期間に、麦の取入、田植準備をする。種籾は数日水に浸していた。

四、代かき

田鋤後水田にするため一部畦作りをする。畦ぎわの土をねって作った。その畦へ大豆を植えていた。畦豆とも言っていた。畦が固まると水を引き「まぐわ」で代がきをする、一面が水田となる。

五、苗取(苗引)

四、五寸に伸びた苗を両手で四、五本ぐらいずつ引き両手一杯になれば合わせて一束にする。一反分の苗は百八十から二百束ぐらいであった。その束を草刈簞にのせ、肩になう、水田の中へ入り、歩きながら、あち、こちへ苗を投げ入れていた。「苗打ち」といつて動的な田植風景の、よい眺めであった。

六、田植

田植は一家一族総出の一大行事であった。赤んぼうまで出て畦端で見っていた。田植定規(竹と紐の二種類あった)にそって植えていく。小学生ともなれば大人の間へ入って植えていた。田植は夏の長時間の重労働であった。そこで農家の多くは田を植えてくれる人、早乙女さんを雇っていた。

山の方、田植の終わった農家の人々で、田植期

間中泊まり込みで来てもらっていた。二、三人から四、五人も雇っていた。朝四時起きで五時頃には、もう田植を始めていた。夕方は七時すぎまでも仕事をしていた

田植は雨天でも計画どおりしていた。「みのかさ」は常時持つて田へ出ていた。

一戸に一ヶ所五穀豊穡の神様のお札を、さか木、それにごまめ、たつくり、ご饌米と共に水田の中央あたりに祀っていた。これを「おさんばいさん」と言っていた。

七、田の草取（水田の修理）

水田の草取りと土壌を耕す仕事

○田打↓田打ち用、熊手で株間の土を打ち返す。たて横一回ずつ。

○田ころがし↓爪のついた回転する六角柱のついた手押し除草器を押して通る、たて、よこ一回

○田すり↓八反ずりで株間をすっていく、たて、よこ一回

○草取↓田の水を落とし、水田の中を四つんばいになって、稲の株元の土をかき、除草する。
むし暑く、夏一番の重労働であった。

八、稲の害虫とり

○めい虫↓稲が成長するにつれ、めい虫が寄生し、

茎や、藁が黄色、白色になる。それと小さい虫とり鎌で切り取る。

○うんか↓うんかの油けりをしていた。「うんか」が発生すると、水田へ水をため、竹の筒などで、油を流し、油が水面へ広がったところで、水をけって稲の葉や茎にかける。「うんか」が水面へ落ち死滅する。その水を川へ落とす。

九、取入れ

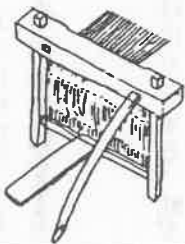
○稲刈↓一人が、ふつう四列ずつ刈った。二、三日そのまま田で乾かし束にして一ヶ所に集積する。

○脱穀↓足踏み脱穀機で田で脱穀する。

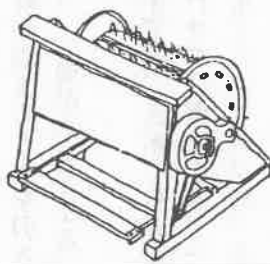
以前は千歯で一にぎりずつ引っぱっていた。脱穀した籾は、箕や、けんどで選別し家へ運ぶ。

○乾燥↓運んだ籾は、陽のよく当たる庭か、近くの田へ刎ほし場をつく

千歯



足踏み脱穀機



り、こもを敷き、むしろをのべて乾燥させていた。晩秋の早朝からの、「むしろぼし」の作業は寒い仕事であった。多い農家では、むしろ百枚以上も並べていた。

○籾倉入れ↓乾燥した籾を入れる場所（籾倉）へ入っていた。

○籾摺↓昭和の初期頃から、籾摺機で玄米にしていた。以前は農家の屋内の土間で臼を人力で回し籾摺をしていた。

十、米俵

斗拵で一斗を量り、四斗俵に入れ一俵の米俵にする。米俵も麦俵も稲藁で作った同じ大きさである。米俵の結び縄は五ヶ所で締め五本だった。（麦は三本）米の出来は反当六〜七俵ぐらいだった。

◎麦作り農耕作業

一、麦蒔き準備

○田鋤き↓稲の取入れ後十月末から十一月にかけ田鋤きをする。二往復で一行の麦の畝づくりである。当時は畝へ麦を蒔いていた。鋤きやすくするため、株切りをすることもあった。

○くれたたき↓鋤くと大きい土の塊になっている。その塊を砕くため小鋤で小さく砕いていた。

た。又、ころがし（金の棒をさした大きい木の丸太）を牛力でころがし土の塊を砕いていた。

○かんぎ切り↓畝にそって麦を蒔く床づくり、人力でかんぎ切り（土を左右に分けて麦蒔く床づくり）を引っ張り麦床づくりをする。

二、麦蒔き

十一月中旬から下旬頃まで、反当二升程度の種を手で畝にそって蒔く。かんぎ切りに麦蒔器（丸い円柱形の回れば穴から麦種が出るもの）を取りつけ蒔いてもいた。

そのあと、「八反ずり」で麦に土をかぶせる。続けてすくと、切藁か、土肥ふりをする。元肥は麦蒔き前か後にふっていた。

三、麦修理（麦の中と言っていた）

○一番修理↓十二月末から翌一月にかけてする。麦が一寸位伸びた頃、麦の生えた両側を田鋤きですいてゆく。後板鋤で生えざわをけずり、畝間の溝を牛力で通す。

一番修理頃までに麦踏みをしていた。

○二番修理↓二月中旬から三月にかけてする。麦が分けつし、六、七寸ぐらい伸びてきた頃二番なかきで畝間の土をかき混ぜる。後、溝を通す。その時、土入れをしていた。

○三番修理→「止め谷」と言っていた。三月から四月にかけてした。「なまかずき」又は、まぐわで畝の下のを土をけずり、その土を板鍬で麦が倒れないよう、土入れ、土寄せをする、これは板鍬にかかる土の量が多く、かなりの重労働であった。

このようにして麦は青田からだんだん黄褐色に変わってくる。(あちら、こちらで鯉のぼりが沢山泳いでいた。)

四、麦秋(麦の取入れ)

○麦刈→六月になると畝にそって鎌でひとにぎりずつ刈り畝に並べ置く。二、三日そのままにしておいた後束にして一ヶ所に集積する。その間雨天にでもなれば裏返しして乾かし大変だった。

○麦こぎ→千歯(麦を穂首からもぎとる道具)を一人一台宛でひとにぎりずつ千歯にひっかけて引っぱっていた。夏の陽ざしを受けて田での作業である。一日一人で一反分の仕事をする人は相当な働き手であった。

○乾燥→田でこいだ麦は籠か「四つほご」(稲藁で作った円形の入れもの)に入れ、荷車か、肩でになって納屋まで運ぶ。家の陽当たりのよい所で乾燥させる。

○脱穀→大正時代までは「からさお」を回し麦をたたいていた。その後唐箕で選別していた。

五、麦俵

一斗拵で四杯俵に入れる。内俵・外俵は米と同じ大きさである。口を締め、俵の横縄は三ヶ所で結ぶ、これで出来上がりだ。当時ふうう反当、四俵から五俵の生産であった。天候に恵まれ、うまく作る人は六俵ぐらい収穫していた。

◎その他の作業

直接の農耕ではないが、雨天の日、夜間(夜なべ)には、縄ない、俵や、こも編み、ほご作り、むしろ打ち、など稲藁作業が沢山あった。

特に戦前・戦時中は徴兵などもあり、労働力不均衡でいろいろな共同作業、手伝い合い、奉仕など協力することが多かった。

3 農業住宅

代々の農業を受け継ぐ戦前の中堅農家住宅

① 伝統的な藁葺農家も、明治末には瓦葺の新築に切替える者も出始めるが、当家は両親と子供六人に祖母を加えた九人家族で、一町余反を耕作する純農家である。

中心の藁葺住居部は、明治の中頃、築後二十年の家を他から譲り受けての再築と聞が、北や西側の付属舎が建ち揃い、仕上壁や外部の腰板張りが完了する迄には、更に十余年を要したとの由、荒建ての家で生活しながらの長普請の苦勞は、大変だったと思われ、当時の苦しい農家経済が偲ばれる。

② 当家での住居部と農作業部の広さの比は半々で、農家一般の範囲内といえよう。ところで、明治期の臼挽^{うすびき}初摺^{もみすり}の作業面積は、小規模で二間角^{にんかく}、余裕をみれば三間角^{さんかく}の土間が必要で、これに同じ



広さの住居部と併せて、奥行二間、間口四間の八坪の家を農家の最小原形と想定し、これよりどう拡がり、どう発展して行くかを皆さんと共に考えてみると、先ず、この八坪の家の四方に勾配の緩い底を継足して広がるのが、一番自然であるように思う。当家の形態は将に、この発展過

程に添って生まれたものと確認できる。先の①項に言う明治末頃始めた上屋付、箕甲葺瓦屋の家形も、質の差を別とすれば、平面的には全く同類といえよう。

③ 当家建築時の明治中頃は製材所も無く、柱の四隅には丸味をつく材が多く、小屋材も丸太が主体で、角材は一部の造作材に限られるのが普通であった。各部屋は、一応障子や襖で仕切られてはいるが、大きい一室の住宅でもあり、土壁と瓦を除く他は木や藁が主体の家で、火災には至って弱かった為、火の用心は昔から厳しく躰けられてきた。

藁葺屋根は、材質上どうしても、二、三十年毎には葺替えが求められる。材料の麦わらは、自家で集積するにしても技術的な面があり、誰にでも出来るとはいかない。然し、長年月の内には村人の中から、葺替えのリーダーになれる専門家が自然に育ってきて、この人たちを中心に近隣総出で、互に助けたり助けられたりして葺替えがうまく配分されて行われてきた。この実績は高く賞讃される。

④ 明治の中期頃は、まだ藩制時代の封建制が強く残っていて一家の長は、財布の紐は勿論、家の内外を問わず一家の総ての権力を握っていた。従って、一家の年配の主婦が「私らこの年まで、家計には触れずじまい」こんな会話は珍しくなかった。食事でも主人・長男・次男と定めた位置に箱膳が配られ合図で食事開始となる。

床・違棚・書院の付いた座敷は家の格式を現し坪庭と

共に接客部屋で、平素家族の者は使用しない。

⑤ 大正期には十燭光の電灯がつけられるようになるが、当家のように二灯の導入は少なかった。昭和も十年代になるとボツボツ「ラデオ」が入り始めた。やがて戦争が拡大に向かうと、関心が戦況に集中されるようになり、太平洋戦争開始頃には、全戸に普及されるに至った。

当家の平面で、も一つの特徴は、部屋数に比べて、押入等収納箇所が殆ど見当たらない点である。その頃、家庭での子供の持物は、若干の衣類、僅かな学用品以外には何もなく、風呂敷包一つあれば足りていた。家具にしても、夜具、炬燵、火鉢等が中心で、下駄箱、タンス、戸棚以外の家具は、殆ど持たなかったから、必要だったと思われる。

⑥ 平面図の番をたどりながら、少し説明を追加しよう。

①さんじよう……兄弟三人の寝るだけで一杯の室。
②あがりま……来客の応接や通路としての使用。
③おちま……少し低い板張落間おちまは、一部の畳と共に、
ちやのま……一家の食事場所、夜は三姉妹の寝室。
④へや……両親の寝室、唯一の戸棚がある。
⑤ざしき……正月・祭等以外は入らずの間。
⑥べんじよ……上・下用に別れ、叩きの便溜に直結。
⑦ふろば……外焚、五衛門釜、便溜へ流し肥料に。

水汲、風呂焚は子供の分担、風呂の

営 農 部

⑧はなれ……無い近所の人達も、時々、入浴招待。
⑨すいじば……年寄りの隠居部屋。
漆喰塗のくど、松飾りの荒神棚、水吸は手押ポンプかつるべで。水神を祀る。

みそべや……味噌、醤油、諸漬物、総て自家製。

⑩きごや……冬期に年間使用の薪を準備する習わし。

⑪にわ……天井も無く、屋根裏露出の土間庭は、
刳摺が屋外となり農産物置場に使用。

⑫うちにわ……機織場の他麹の発酵場所にも利用。

⑬わらおきば……牛の飼料藁を、くろに積んで貯蔵。

⑭けいしゃ……屑米を養鶏の餌として幾羽かを飼う。
草やいなご採りは子供の仕事。

⑮えらぐち……荷車類の出入や、これらの置場の外、
俵締の作業場にも使用。

⑯だや……牛屋二頭分を確保する。

⑰ひよう……内壁には厚板を張り、土蔵的に造った。
とだな……米倉、七、八十俵の収納能力。

⑱うらにわ……米搗場が一部を占領。他は通路庭。

⑲にしぐち……諸肥料、まぐわ類置場。

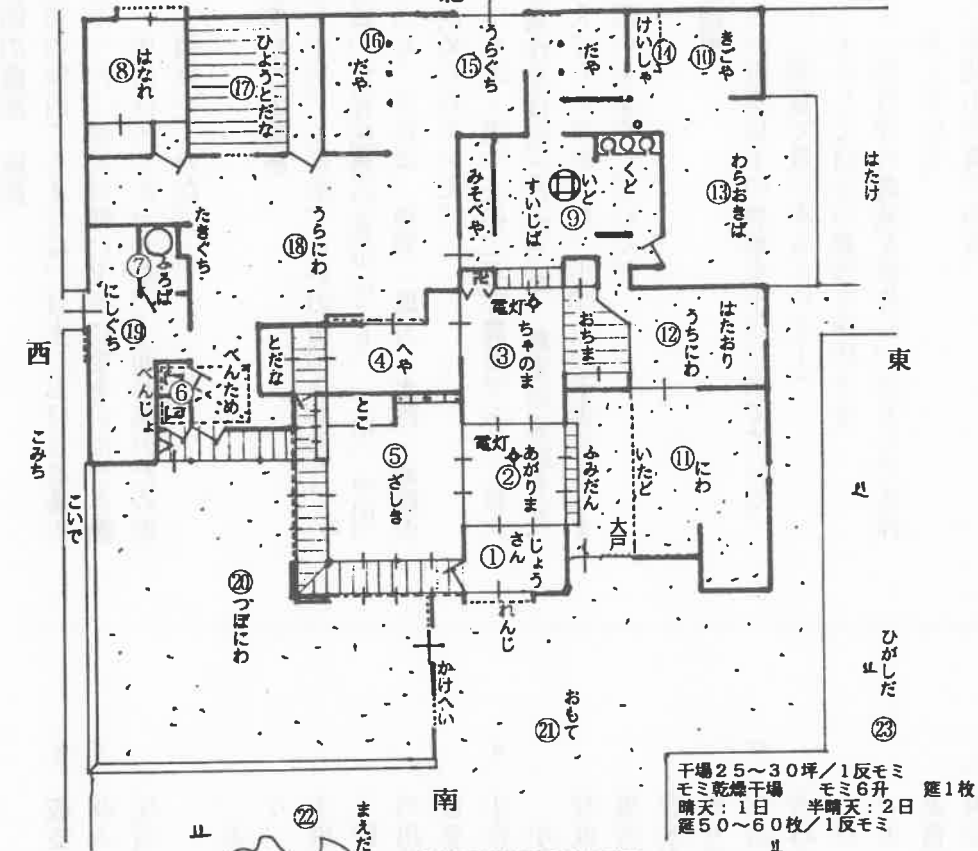
⑳つばにわ……一角に、瓦製の小さな屋敷神を祀る。

(田 中 義 一)

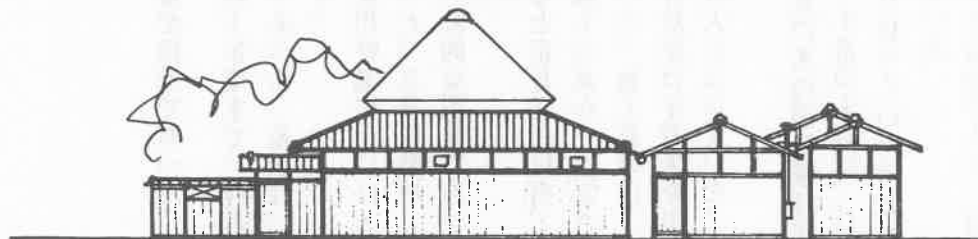
農家住宅の図面

平面図
北
みち

藁葺平家建農家住宅
明治中期頃の建築



南面図



東面図

4 農家の家計

① 昭和初期の農家・農民

大正から昭和の戦前ごろまでは、日本における農業のウエイトは高かった。農民は朝に夕べに星をいただき働くことが多く、生活は苦しかったが、一面お国のため増産といつてよく頑張っていた。

② 北伊予あたりの農家

農家一戸当たり平均、七反歩ぐらいの田畑を耕作していた。農地も当時、賃貸価格の表示により、上田、中田、下田の差があった。それは、地形・地力・水路・通路の便などにより決められていた。

なにをいっても米・麦中心の二毛作農業であつて収入源としての野菜作りは殆どなかった。農家の家族も五、六人、七、八人ぐらいであつた。小学生の子供に至るまで農作業の手伝いをよくしていた。

③ 農家の規模

ア、地 主…一町歩以上の農地を小作に当てている。

(部落で数戸あるていど…)

イ、自 作…主として自分の農地を耕作する。

ウ、自小作…一部自分の農地を耕作し、主として小作をしている。

エ、小 作…全部小作農である。

以上のタイプで、特にウとエが多かった。

④ 収支の概略

ア、収入(收穫)

反当、米↓七俵

麦↓四俵

の生産量が標準であつた。

米価は大正末期から昭和十年頃まで、別表の通り、一俵につき十円検討であつた。麦価は、その半価ぐらいであつたと思う。

野菜作りは主として自家用野菜で中にはスイカの出荷などする農家もあつた。又桑を栽培し、養蚕をする農家もあつたが一時的な現象であつた。

イ、小作料(年貢米)

小作農家は收穫が終わると正月迄に反当、四俵程度の米を年貢米として地主の家か、指定された場所へ荷車で運び納めていた。地主農家はこの年貢米が収入であつた。小作農家は年貢米を出した残りの米と麦とが主たる収入になつていた。

ウ、支出(米麦と換金)

○当時の農家の一人当り主食の米の消費量は年間、一石(二俵半)であつた。平常の主飯は、だいたいの米・麦半々で麦もかなり食べていた。又麦は、家畜の飼料にも多く使つていた。

○換金…主として米売却により現金が入る。余裕が

あれば貯金もできたであろう。当時の米の売却は米俵、三、四俵をリヤカー（荷車）に積んで、郡中か松山の米屋へ売りに行っていた。帰りに農具や生活必需品を買って帰っていた。

○部落に世話役（仲買人ごと）もいて農家から直接売却もしていた。

○物々交換.. 当時はいろいろな物売りが家々を訪問していた。松前の「おたたさん」も毎日のように来ていた。これらの購入代金がわりに米を使うことが多かった。時には麦もあった。

エ、その他の収入

○農作業用の用具の製作をしていた。

俵・こも・むしろ・ほご・縄など、又、わらじ、ぞうりの履物作りもしていた。農閑期や夜なべに...

○主として男子は多忙な人手不足の農家へ、日傭いとして労働力を提供していた。

○南の山の雑木を臨時に買って協同で薪取りに行っていた。（冬期から春にかけて）

○女子は農作業のひまをみて伊予絣の機織りで僅かな賃金を貰っていた。

○米、麦、野菜を使い自家製の、みそ・醤油作りや漬物もつけ副食物のたすけにしていた。

○殆どの農家には養鶏十羽程度飼っていて卵に不自

由はしなかった。

○部落の祭祀や行事には地主や、大作農家には寄付や、出費が多かったようだ。これらのしきわ日（祝い日）には餅をつくことが多く年間十回以上度々ついていた。そんな日は平常と違い、格段のご馳走をしていた。

⑤ 農家あげて協力の家計

以上農家の人は働くばかりで娯楽は少なかった。家族が元気で働けることが楽しみであったように思う。このことが家計を楽にするものでもあった。家族・近隣励まし合い助けあってよく仕事をしていた。

五 その他

1 忠魂碑の修復

近代日本において戦死者を祀るために建立された石碑や石塔で「ムラやマチの靖国」として理解されている。

今回修復された忠魂碑の、最初の起工は昭和十二年頃だったと記憶している、というのは下校中に石工の仕事ぶりをしばしば見ていた。場所は碑の前の道の東側を仕事場にしていた。そして仕事場の上に日覆いのゴザをかけてあったから、時候は暑い夏だったのだろう。忠魂碑の揮毫は永田出身の中村重一氏（当時海軍少将に昇進）だったので特に関心があった。

その後昭和十四年七月、日中戦争開戦二周年を記念して、全国的に一市町村一基を原則に忠霊塔建設運動（財団法人大日本忠霊顕彰会）が起こったので、村では昭和十六年に忠魂碑を建立した。（祀られている人数は三六二人）

忠魂碑の前身は遺族や村民が中心となって建立した「招魂碑」「弔魂碑」という個人碑であったが、日露戦争（一九〇四～五年）での戦死者の激増によって、共同で祀る石碑の建立に至り、多くは神社の境内や学校の敷地内に建立された。そして靖国神社の末社として位置付けられた。だが敗戦後、米軍より撤去を命じられたり、地震による倒壊で、やむなく撤去されたものも多数あるが

平和条約を機に復活した忠魂碑は多い。

この忠魂碑は、基礎のひび割れで、事故発生の懸念が持たれていたが、幸いにも地元民の尊崇の念厚く、浄財を出しあつて修復したので、次の世代に送り渡しが出来よう。

※補充関連資料

【千鳥ヶ淵戦没者墓苑】

第二次世界大戦に於ける氏名及び遺族不詳の日本軍（民間人も含む）の遺骨を納骨する無宗教の国立墓地。昭和三四年に東京九段に竣工した。面積は約五〇〇〇坪、遺骨の数は平成八年七月現在で三三万九三八一柱、遺骨の収集は引き続き実施されている。（環境庁が管理し、運営は民間有志による）



改築された忠魂碑
（平成10年完了）

（表） 忠魂碑

海軍少将 中村重一謹書

（裏）

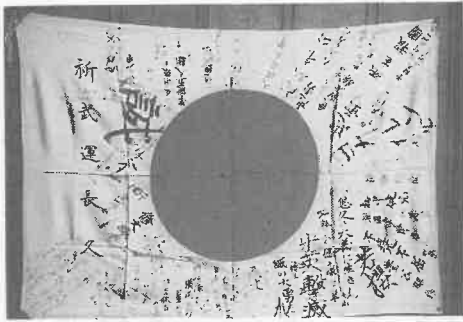
昭和十二年五月二十七日

帝国在郷軍人会北伊予村分会建之
昭和三年九月北伊予友愛会再建

2 出征風景

昭和十二年七月七日、蘆溝橋で起こった日中両軍の紛争は「聖戦」の美名にかくれ、その戦火は中国全土に及んでいった。戦線が拡大されると一緒に兵力の増強も必要となり、予備役、後備役、在郷軍人も招集令状一枚で強制的に前線にかりだされた。次々と壮年男子は動員され、全国各地で同じような出征風景が展開される。

一人の壮年に招集令状（赤紙）が来た。その一家では一番大事な働き手である。それでも「名誉なことだ。」とか「お国のためだ。」「男としての最大のご奉公だ。」とかその一家をかえりみることなく『祝い事』にすり変えられてしまう。



隣近所からは祝儀袋がとどけられ、人々は集って祝宴を開き出征の準備にかかる。前庭には幟竿に大きな日の丸を揚げ、頂上から日の丸の小旗をつけた綱を四方八方に張りめぐらす。（これは

防諜のため昭和十四年頃から禁止された。）

出征当日は氏神様に立ちよって武運長久を祈願して北伊予駅まで歩いていく。隣近所の人々は日の丸の小旗を手に、ぞろぞろとついていく。

出征する当人は私有の軍服か、それに似た服（時には背広の人もいた。）に赤だすきをかけている。（後に友人の寄せ書きした日の丸をたすきにしていた。）

「祝 出征 ○○○○君」の大きな幟を先頭に駅前に集まる。大抵四、五人の集団で入隊することが多かった。駅前の広場は一般の人、青年団、婦人会、小学生でごった返していた。北伊予村、南伊予村それぞれのグループで出征の儀式が行われる。

村長さんの祝辞にはじまって各種団体長のあいさつがつづく。ただ武勇を鼓舞するだけのものだった。

出征者の答礼、村長さんの発声で萬歳三唱。後は小学校音楽隊による軍歌の演奏。子どもたちは声高らかにそれを和していた。

列車の最後尾で見えなくなるまで日の丸を降り続けていた人に見送る人も何かさびしさを感じながら三々五々別れていった。

昭和十六年、太平洋戦争になってからはこのような盛大な見送りはできなくなった。防諜のためということとで禁止され、一人、二人と静かに、かくれるように出征していった。

3 特攻隊員の手記

神風特別攻撃隊流星隊長

故 林憲正海軍少佐の御遺稿（日誌）の抜粋の一部
を掲載させて頂きます。

七月三十一日

今日こそ出撃の日である。我が流星隊八機の特攻攻撃の日である。朝起きると、深い深い霧、山の木々の葉や梢から、その霧が滴となって、ポタリポタリ滴り落ちていた。飛行場へ来ると、私達の飛行機に搭載すべき品々がきれいに整頓されて置いてある。昨夜、身につけるものもすっかり更えた。母上の送って下さった千人針も腹につけた。弓立の小母様の下さった新しい純白のマフラーも用意した。私の身の回りにある最上等のものを身につけたわけだ。出撃命令を今か、今かと待ち乍ら、ただ独り防空壕に入って、これを記している。

父上、母上はじめ兄弟姉妹、その他親戚知人の皆様、さようなら。御元気でやって下さい。私は今度は「アンデルセン」のおとぎの国へ行つて、その王子様になります。そして、小鳥や花や木々と語ります。

大日本帝国よ、永遠に栄えんことを。

昭和二十年八月三日

秋晴れの夏が続いて、私はまだ生きている。あの日、敵機動部隊は姿を消してしまったのである。私たちの特

攻待機も解けた。（後略）

八月九日

敵機動部隊が再び本土に近接してきた。

一時間半後に、私は特攻隊とし、ここを出撃する。

秋の立った空はあくまで蒼く深い。

八月九日！

この日、私は新鋭機流星を駆って、米空母に、体当たりするのである。

御両親はじめ皆様さようなら。

戦友諸君、有難う。

以上が最後の御遺稿であります。

父林実正、母千延三男 大正八年十一月十八日生
海軍少佐、従六位勲五等双光旭日章功三級金鷄勲章
顕忠院鉄肝憲忠居士

略 歴

昭和十八年慶応大学経済学部卒業、学徒動員に従い九月一日三重航空隊に入隊す。

昭和二十年八月九日神風特別攻撃隊員として鹿島灘沖の敵航空母艦群に突入し武勲を樹て戦死す。特旨を以て二階級特進海軍少佐に任ぜられ、功三級金鷄勲章を授与される。行年二十七才。

臨時召集令状

愛媛縣伊豫郡北伊豫村

第三乙種補充兵 山田正心

右臨時召集ヲ命セラル依テ左記日時到着地ニ參著シ此
ノ令状ヲ以テ當該召集事務所ニ届ツヘシ

到着日時	昭和二十年三月一日
到着地	西部第六二部隊
召集部隊	西部第六二部隊

松山聯隊區司令部

乗車(船)區間	自 驛 至 驛
乗車(船)等級	參 等
急運 行料金	

運賃後拂證ニ關シテハ該證裏面注意書ヲ參照スヘシ

軍用紙納

臨時召集應召員旅客運賃後拂證

氏 名	
乗車(船)區間	自 驛 至 驛
乗車(船)等級	參 等
急運 行料金	

乗車(船)月日 昭和 年 月 日

發行官衛 松山聯隊區司令部

運賃支拂部隊 西部第六二部隊

これは原寸大です。ある日突然この赤紙（召集令状）が来た。必ず戦場に行かねばなりません。今、軍靴の音がたかくひびいてきそうなのこの頃です。平和のために力を合わせましょう。

●

- 記載事項ヲ訂正シタルトキハ記載者ノ捺印ヲ要ス

2000

[illegible]

年 表

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	昭和	
1945	1944	1943	1942	1941	1940	1939	1938	1937	1936	1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	1928	1927	年	
60円00銭	18円80銭	18円42銭	16円90銭	16円50銭	16円30銭	16円15銭	13円42銭	12円90銭	11円80銭	10円90銭	14円80銭	10円80銭	8円20銭	6円50銭	6円28銭	10円40銭	10円60銭	11円85銭	米価/俵	
○ヤルタ会談 ○東京他各都市米機による爆撃 ○米軍の沖縄上陸 ○鈴木貫太郎内閣 ○広島・長崎の原爆 ○終戦の玉音放送	○緊急国民動員・学徒動員決定 ○小磯内閣 ○学徒女子挺身動労令公布 ○サイパン・グアム玉砕 ○神風特攻隊編成	○比ルソン島作戦 ○戦時非常措置法通過 ○ガダルカナル島撤退 ○学生の徴兵猶予停止し学徒戦時動員態勢確立す	○ミッドウエー海戦 ○食料管理法公布	○東条陸相「戦陣訓」通達 ○第三次近衛文磨内閣 ○東条英機内閣 ○真珠湾から太平洋戦争開始	○米内光政内閣 ○第二次近衛文磨内閣 ○紀元二千六百年記念行事 ○大政翼賛会発足	○平沼騏一郎内閣 ○ノモンハン事件 ○阿部信行内閣 ○第二次世界大戦勃発	○国家総動員法公布 ○スポーツ界で横文字追放	○林銑十郎内閣 ○近衛文磨内閣 ○蘆溝橋事件で日中戦争開始 ○国民精神総動員実施 ○日独伊防共協定調印	○二・二六事件（蔵相等殺害） ○広田弘毅内閣	○政府国体明徴の声明発表	○満州開拓政策展開 ○岡田啓内閣	○日本国際連盟脱退 ○米穀統制法公布 ○関東軍日支停戦協定	○上海事変勃発 ○満州国建国 ○五・一五事件（首相射殺） ○警視庁に特高警察設置	○若槻礼次郎内閣 ○満州事変勃発 ○犬養毅内閣	○農作物大暴落農村深刻化	○浜口雄幸内閣 ○世界恐慌となり就職難	○関東軍張作霖事件 ○内務省に特高警察設置	○金融恐慌勃発 ○田中義一内閣		
←ニホンヨイクニツヨイクニ・セカイニヒトツノカミノクニ→					←ススメススヘイタイスス→					←ハナハトママス・テンノウヘイカバンザイ→大正7→										
○松山市戦災 ○大谷池完成	○丸善石油開業 ○伊予実業学校→伊予農業学校と改称 ○小作米→金納化に	○豪雨を伴う台風	○関門トンネル開通	○米穀配給制（二合五勺） ○外食券 ○松山放送局小栗町に開局	○県護国神社竣工	○石油統制強化で木炭自動車出始る	○東レ愛媛工場開設 ○出合コンクリート橋竣工	○松山連隊出征 ○郡中線軌道拡幅 ○東レ誘致松前港大改修 ○軍需工業活発化		○大谷川内壁改修	○松山大雪（三十裡） ○大旱魃 ○室戸台風	○今出銀行倒産 ○松山城小天主・櫓焼失	○大谷池一期工事完了	○高浜線電化	○松山連隊天津派遣 ○愛媛県庁舎落成	○松山―南郡中列車開通 ○早魃	○松山―西条列車開通			
○小学校以外は授業停止→学徒動員へ ○松山航空隊・松山予科練習隊へ爆撃 ○松山戦災者受入れ―縁故の家々や字内の公有建物に	○学徒動員法施行 ○女子挺身隊（三年以上） ○勤労動員・産業動員 ○北小にても上級生道路修繕参加 ○北伊予農業会設立 ○村内赤痢流行死亡者多数	○伊賀上武村長 ○中学校の修業年を四年とし教育目的が「皇国の道に測り国民の練成をなす」に変革 ○重信川五箇所決壊の大洪水四百名小学校に避難 ○学校や家庭で防空壕が始まり、道路側や運動場に大豆が蒔かれる ○幼児の農繁補育も開始 ○北伊予郵便局開局	○後藤光太郎村長 ○食管法で米麦供出に強権発動始まる ○毎月八日を「大詔奉戴日」と	○田中四郎村長 ○村中大政翼賛会発足 ○松前牛飼ヶ原松並木三百本伐採 ○男子中学生戦斗帽・巻脚半・整列登校・女学生モンペ化登校となる ○古鉄類の供出（明治以来の松山城正午の号砲も消える家庭・学校・寺院等総て）	○北伊予村役場落成 ○防空訓練開始さる	○銃後奉公会結成 ○消防団→警防団と改変 ○賃金・地代・家賃統制令公布 ○5月より月の一日を興亜奉公日として廃品回収を始める	○大字区長が行政の一部を代行できる内務省令の改訂 ○衣食品（米・砂糖・マッチ・衣料）の切符制開始さる ○隣組（総動員法の最下部組織）発足 ○各字に家庭警防組合設立される ○駅前や医者が抱えていた人力車が消えた	○北伊予忠魂碑建立 ○国防婦人会戦地兵用真綿講習会開催（65名） ○寺院団と婦人会で某大佐を招聘し皇軍戦勝祈願会開催	○家庭婦人の総力戦体制組織である国防婦人会北伊予支部発足 ○北小校新講堂竣工（旧建物は北農協の前身が譲受）	○軍友会北伊予支部発足	○各字共泉の改修など旱魃対策の支出激増	○明治36年創設の愛国婦人会北伊予支部結成 ○北伊予消防団昨年に続き第4条金馬簾授与	○大谷川（棚川）補修完了 ○人絹の「アッパッパ」一部の婦人間に流行 ○出征兵を北伊予駅で歓送	○大谷川大溝側へ決壊 ○地価・賃賃価格に改訂 ○コンクリート製中川原橋落成・散餅	○北伊予駅落成 ○永田―横田道拡幅	○本田 欽村長 ○県道松前―森松線3・9米幅拡張工事完了 ○北小二階建校舎増築	○ラジオ体操開始 ○北伊予駐在所新築	○遠藤良貞村長 ○鶴吉電力による揚水開始 ○北小高等科3年→2年制に改む		

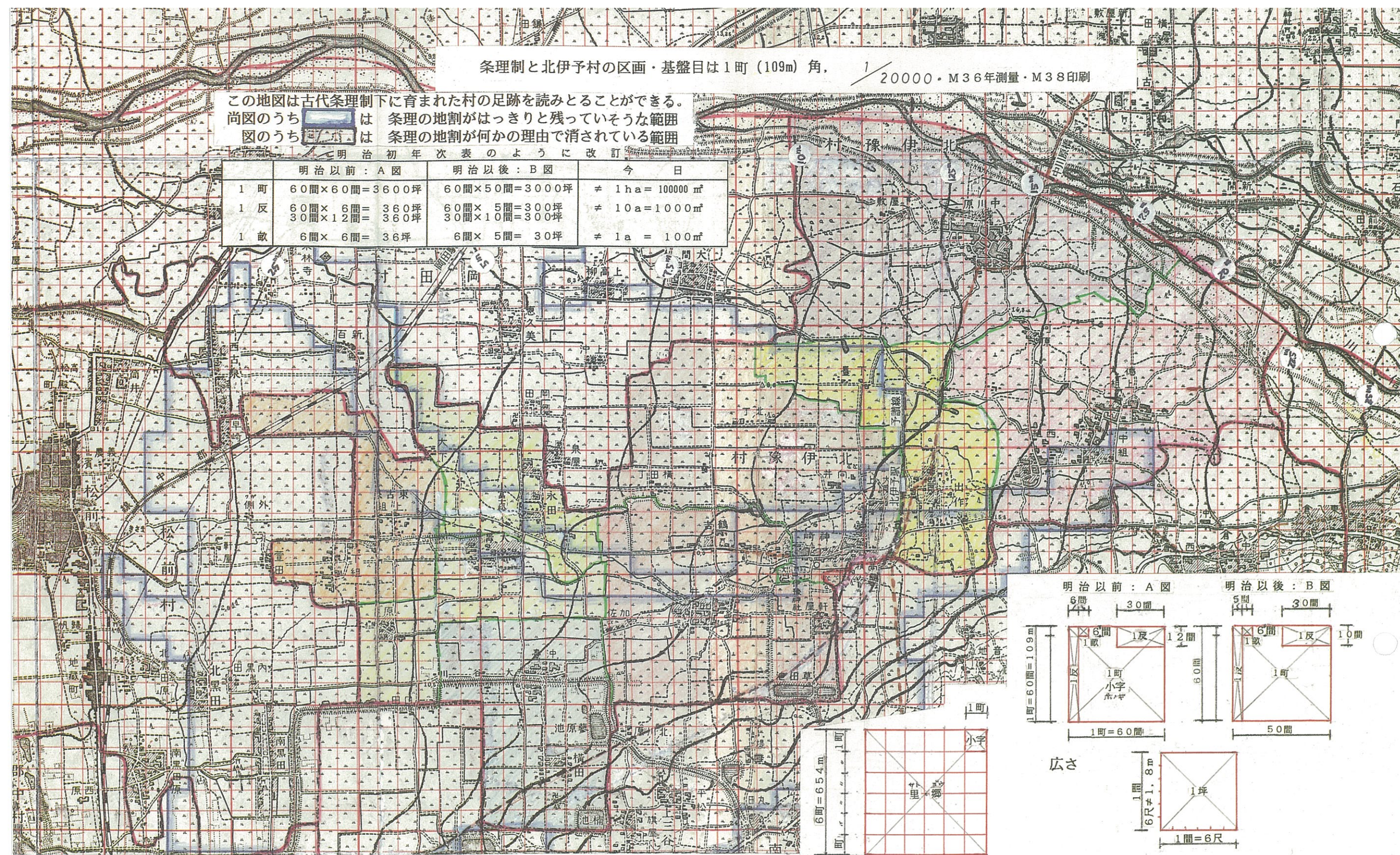
昭和		和																				明治																年																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
20	19	18	16	15								14								13								12				11	7				6	2	43	38	37				30	28	27	26	代																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
1945	1944			1943	1941	1940								1939								1938								1937				1936	1932				1931	1927	1910	1905	1904				1897	1895		1894	1893																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
8	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	7	6	5	4	3	2	1	番																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
終	同	ラ	あ	若	そ	月	国	暁	空	燃	隣	紀	出	太	兵	父	愛	麦	荒	日	上	愛	海	露	あ	走	討	爆	ラ	朝	水	戦	橘	日	日	軍	雪	婦	ポ	曲	時	唱	歌																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
戦	期	バ	あ	驚	う	火	民	に	の	ゆる	組	元	征	平	隊	よ	馬	と	驚	の	丸	海	行	営	あ	れ	匪	弾	ジ	鮮	師	戦	中	本	本	艦	の	人	ー					歌	い	だ	し	索	引																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
	桜	唄	紅の血は燃ゆる	の歌	その意気	水木金	進軍歌	祈る	勇士	大空		二千六百年	を送る歌	行進曲	ありがとう	あなたは強かった	愛馬進軍歌	兵隊	荒鷲の歌	日の丸行進曲	上海だより	愛国行進曲	行かば	露営の歌	あわが戦友	走れ！大地を	討匪行	爆弾三勇士	ラジオ体操の歌	朝鮮北境警備の歌	水師營の会見	戦友	橘佐	日本陸軍	日本海軍	軍艦行進曲	雪の進軍	婦人従軍歌	ポーランド懐古	これらの歌は遠く離れた戦地と故郷の方達の心の連帯に役立った																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
	貴様と俺とは同期の桜同じ兵学校の庭に咲く咲いた花なら散るのは覚悟みごと散りましょ国のため	さらばラバウルよまた来るまではしばし別れの涙がにじむ恋し懐しあの島見れば椰子の葉蔭に十字星	花もつばみの若桜五尺の生命ひっさげて国の大事に殉ずるは我ら学徒の面目ぞああ紅の血は燃ゆる	若い血潮の予科練の七つ鉦は桜に錨今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にやでかい希望の雲が湧く	なんにも言えず靖国の宮のきざはしひれ伏せば熱い涙がこみあげるそうだ感謝のその気持揃う揃う気が持が国護る	朝だ夜明けだ潮の息吹きぐんと吸い込む銀色の胸に若さの漲る誇り海の男の艦隊勤務月火水木金	この陽この空この光りアジアは明ける厳かに燃える希望の一億が傷痕の勇士背に負うていま踏みしめる第一歩使命にこぞる進軍だ	あああの顔である声で手柄たのむと妻や子がちぎれる程に振った旗遠い雲間にまた浮ぶ	二つ三つ	恩賜の煙草をいただいてあすは死ぬぞと決めた夜は曠野の風も腥くぐつと睨んだ敵空に星がまたたく日本空行くわれら	燃ゆる大空気流だ雲だ騰るぞ翔るぞ迅風の如く爆音正しく高度を持して輝くつばさよ光華と勢え航空	とんとんとんからりと隣組格子を開ければ顔なじみ廻して頂戴回覧板知らせられたり知らせたり	金鶏輝く日本の栄ある光身につけていまこそ祝えこの朝紀元は二千六百年ああ一億の胸はなる	わが大君に召されたる生命光栄ある朝ばらけ讃えて送る一億の歓呼は高く天を衝くいざ征けつわもの日本男児	海の民なら男ならみんな一度は憧れた太平洋の黒潮を共に勇んで行ける日が来たぞ歓喜の血が燃える	父よあなたは強かった兜も焦がす炎熱を敵の屍とともに寝て泥水すすり草を噛み荒れた山河を幾千里よくこそ撃つて下さった	郷土を出てから幾月とともに死ぬ気でこの馬と攻めて進んだ山や河執った手綱に血が通う	麦畑	徐州徐州と人馬は進む徐州居よいか住みよいか洒落た文句に振り返りやお国訛のおかげさ節髯が微笑む	見たか銀翼この勇姿日本男子が精こめて作って育てたわが愛機空の護りは引受けた来るなら来てみろ赤とんぼブン荒鷲ブンと飛ぶぞ	母の背中にちさい手で振ったあの日の日の丸の遠いほのかな思い出が胸に燃えたつ愛国の血潮のなかにまだ残る	海行かば水漬くかばね山行かば草むすかばね大君の辺にこそ死なめ省りみはせじ	見よ東海の空あけて旭日高く輝けば天地の正気深刺と希望は躍る大八洲おお清朗の朝雲に聳ゆる富士の姿こそ金甌無欠揺ぎなきわが日本の誇りなれ	拝啓御無沙汰しましたが僕もますます元気です上陸以来今日までの鉄の兜の弾の痕自慢じゃないが見せない	満目百里雲白く広袤山河風あれて枯木に宿る鳥もなくただ上弦の月蒼し	勝つて来るぞと勇ましく誓って故郷を出たからは手柄たてずに死なりようか進軍ラッパ聴くたびに瞋に浮かぶ旗の波	廟行鎮の敵の陣我の友隊すでに攻む折から凍る如月の二十二日の午前五時	躍る旭日の光を浴びて屈る伸せよ吾が腕ラジオは号ぶ一二三	此処は朝鮮北端の二百里あまりの鴨緑江わたれば広漠南満州	旅順開城約成りて敵の將軍ステッセル乃木大将と会見の所はいずこ水師營	ここはお国を何百里離れて遠き満州の赤い夕日に照らされて友は野末の石の下	四面海もて囲まれしわが敷島の秋津洲外なる敵を防ぐには陸に砲台海に艦	天に代りて不義を討つ忠勇無双のわが兵は歓呼の声に送られて今ぞ出でたつ父母の国勝たずば生きて還らじと誓う心の勇ましき	遼陽城頭夜はふけて有明月の影すごく霧立ちこむる高粱の中なる塹壕声絶えて目醒めがちなる敵兵の胆驚かす秋の風																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					

条理制と北伊予村の区画・基盤目は1町(109m)角,

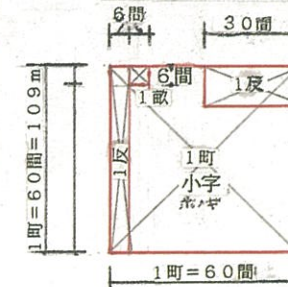
1/20000・M36年測量・M38印刷

この地図は古代条理制下に育まれた村の足跡を読みとることができる。
 尚図のうち  は 条理の地割がはっきりと残っている範囲
 図のうち  は 条理の地割が何かの理由で消されている範囲
 明治初年次表のように改訂

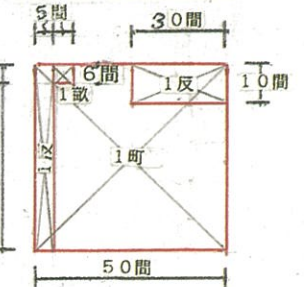
	明治以前：A図	明治以後：B図	今日
1町	60間×60間=3600坪	60間×50間=3000坪	≒ 1ha=10000㎡
1反	60間×6間=360坪 30間×12間=360坪	60間×5間=300坪 30間×10間=300坪	≒ 10a=1000㎡
1畝	6間×6間=36坪	6間×5間=30坪	≒ 1a=100㎡



明治以前：A図



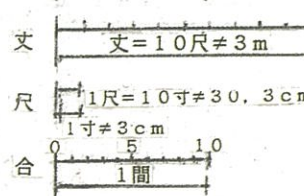
明治以後：B図



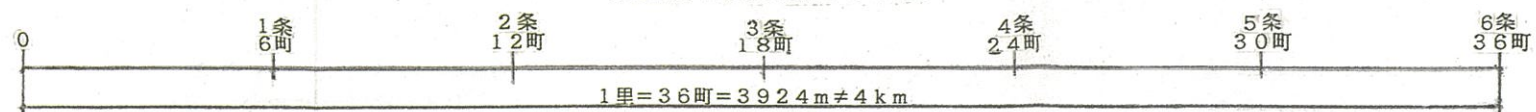
広さ



長さ



条理制と長さ広さの単位



『北伊予の伝承・V』企画・編集委員会名簿

委 員 長	永 田	中 村 文 雄
副 委 員 長	出 作	神 野 弘 良
副 委 員 長	鶴 吉	相 原 隆 志
副 委 員 長	大 溝	田 中 義 一
委 員	徳 丸	田 中 義 和
委 員	徳 丸	八 束 兼 福
委 員	中川原	山 本 庫 一
委 員	中川原	本 多 俊 夫
委 員	中川原	本 田 一 馬
委 員	出 作	西 村 博 明
委 員	神 崎	水 口 義 一
委 員	神 崎	河 野 好 雄
委 員	神 崎	山 口 稻 男
委 員	鶴 吉	松 田 茂 裕
委 員	鶴 吉	濟 川 佳 孝
委 員	横 田	日 野 忠 夫
委 員	永 田	中 村 正 輝
委 員	永 田	沢 田 秀 明
委 員	東古泉	竹 田 光 夫
委 員	東古泉	稲 垣 光 三
松前町東公民館長	出 作	水 口 憲 浩
松前町東公民館主事	北黒田	武 智 達 嘉
松前町東公民館前館長	上高柳	伊 達 中 俊
松前町東公民館前主事	徳 丸	田 中 俊 臣

